ソードアート・オンライン　～直死が視る仮想世界～

プロテインチーズ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧ《ソードアート・オンライン》通称ＳＡＯ。それを人類が目指した仮想世界へのフルダイブ技術を天才科学者、茅場晶彦が実現させた。

しかし、２０２２年１１月６日、午後５時。

《アインクラッド》の《創造神》である茅場晶彦によるＳＡＯのデスゲーム開始の宣言。

その事実に絶望するプレイヤー達の中で死を視る事が出来る《死神》がいた。

ーーー生きているのなら神様だって殺してみせるーーー

これはそんな一人の《死神》の物語。

目次

虚構開闢 1
始終世界 4
死観考察 8
千差異路 11
幕間 15
孤高修羅 19
徒爾遊戯 25
再会別離 32
死神降誕 36
殺人記録Ⅰ 41
殺人記録Ⅱ 47
殺人記録Ⅲ 52
殺人記録Ⅳ 57
罪咎叙述 62
代償簒奪Ⅰ 69
代償簒奪Ⅱ 73
悪鬼蝟集Ⅰ 78
悪鬼蝟集Ⅱ 86
悪鬼蝟集Ⅲ 92
悪鬼蝟集Ⅳ 98
悪鬼蝟集Ⅴ 104

虚構開闢

（あぁ……こっちでもソレは視えるんだな……」

俺がこの世界に来た時に最初に思った事はそれだった。周りの人々を見ると和気藹々と過ごしている。友達同士らしい数人が固まって楽しそうに喋りながら歩いている。

また、別の人物は心なき店主が経営している店を冷やかしている。

さらに、また別の人物はこの世界に来て余程嬉しいのか、笑みを浮かべながら、迷いなく通りを走り去る。

あれが噂に聞く《βテスター》ってやつか？　俺も《ＭＭＯトゥデイ》などでそこそこ情報を仕入れているが……なるほど、あれを見るとかなりこの世界に慣れているのが分かる。

彼らに共通しているのは誰もが希望に満ち溢れた眼をしているという事。これからの冒険に胸が踊っているのだろう。

本来なら彼らの反応が正しいのだろう。

何せこの世界は世界初の仮想世界で行われるＶＲＭＭＯ《ソードアート・オンライン》なのだから。間違っているのはそんな仮想世界に一人で来て勝手に絶望している俺の方だ。

俺の気分を最悪にしている元凶にして、普通の人間なら視える筈がない幼稚園児がクレヨンで描いた落書きのようなソレは、現実に比べれば、まだ色が薄かった。それ故に脳に負担への負担がまだ少ない。だからと言ってそんな見たいモノでもない。

すぐに俺は瞳の奥へ意識して、眼の力をコントロールする。チリチリする。頭の中がグルグルする。

側から見れば眼の色が蒼から黒へ変わったのでギョッとした事だろう。幸いにしてその変化に気づいたプレイヤーはいなかったが。

（結局、仮想世界でも変わらないのか……考えてみればどんなモノでも始まりがあれば終わりがある。それはこっちでも同じって事か）

ならこの現象も納得はいく。

まさかこの時は夢にも思わなかった。この世界が単なる遊びの

ゲームではなく、命を懸けたデスゲームになるという事に。

いくらソレが視えたとしても、せっかく家の者に言って購入してまでしてもらい始めたのだから、例えソレが視えてしまったとしても楽しもう。

一応、そこそこのゲーマーだと自負しているので、この仮想世界での冒険に興味がない訳ではなかった。

チラリと自分のＨＰの端を見る。その隣にはこの世界の俺の仮の名前である《Ｓｈｉｋｉ》の文字が書かれていた。

（この世界は俺の伽藍堂を埋めてくれるのやら）

俺は《はじまりの街》である程度、装備やアイテムを購入するとすぐに《圏外》へ飛び出し、この世界で何が出来るのか検証した。

俺が使用するのは《短剣》だ。現実でもある程度使い慣れているので一番これがしっくりと来たのだ。

《ＭＭＯトゥデイ》に載っていた《剣技》とやらを敵《ｍｏｂ》である《フレンジーボア》に試す。のっそのっそと歩いてるだけなので良い練習台になる。

（なるほど。《剣技》があるのとないのでは雲泥の差だな。身体が軽い。ここまで運動性能に差が出るとは）

現実でも剣術を嗜んでいた俺はすぐに慣れる事が出来た。

ふと周囲を見ると俺と同じように《フレンジーボア》と戦っているプレイヤー達がいる。

友人同士なのか親しげにレクチャーしてもらっているようだ。俺も経験者、つまり元《βテスター》から教わればよかったのだが、人付き合いを煩わしく感じる俺は他のプレイヤーと関係を持ちたくない。そもそも人に借りを作る事が嫌いというのもあるが。

二時間程で大体の《剣技》のコツを掴んだ俺は《はじまりの街》周辺からすぐに走り去り、次の拠点へ向かった。

こんな雑魚どもでは俺を満足させてくれない。

（大体、現実の身体と《仮想体》の違いに慣れてきた。それにこの

忌々しい眼も使う事が出来た）
元々ソロでこのゲームを楽しむつもりだった俺はすぐに次の拠点……《ホルンカの村》へ向かった。

《ホルンカの村》といえばかなり有用な《片手剣》の武器である《アニールブレード》を手に入れる事ができる《キークエスト》があった筈だ。どうやらかなり面倒なものらしく《リトルネペント》というモンスターの中でも《花つき》という奴が落とす《リトルネペントの胚珠》を手に入れるという内容だ。
その出現確率は一パーセント以下でかなり低い。《βテスター》の情報が正しければの話だが。
しかし、俺に関していえばそれは必ずしも必要ない。俺は《短剣》使いで《片手剣》は持っていても意味がないからだ。
なら何故その時間がかかる、且つ面倒な《キークエスト》をわざわざ俺が受けるのか。
理由としてはレベルアップというのもある。が、それは付属的な意味合いが強い。
真の理由は俺が現実世界でも共通の趣味でそういった刃物を集めているからだ。刃物ならば武器ではなくナイフや包丁なども、俺が眼を引くモノならば何でも手に入れようとした。
この世界は剣の世界。気に入った剣を手に入れようとする事は悪い事でも何でもないだろう。
それから俺は大体、一分に一体の割合で《リトルネペント》を屠っていた。
しかし、《リトルネペント》を狩り始めて三十分程した後だろうか。仮想体であるこの身体が突如、光に包まれたのだ。
「はっ？」
そして、俺はどこかに転移されてしまった。それがこの世界の真の始まりだった。

始終世界

目の前の景色が変わるとそこは《はじまりの街》の中央広場だった。
俺だけでなく、他のプレイヤーも次々と現れた。どうやら強制転移されたのは全プレイヤーらしい。あれ程広かった中央広場も一瞬で埋め尽くされた。
プレイヤーからは困惑の声が広がる。中には「ログアウトが出来ない」と聞こえた。
俺は思わず、ギョッとしてメインメニュー中のログアウトボタンを探したがやはり、見つからなかった。
（なっ……!? どうなってんだ？ この強制転移は運営からのバグ報告か？）
それにしては何かおかしい。
俺がこの異常に混乱していると事態はさらに急変した。
上空に《Ｗａｒｎｉｎｇ》の文字が浮かび上がったかと思うと《Ｓｙｓｔｅｍ Ａｎｎｏｕｎｃｅｍｅｎｔ》の文字とともに空を埋め尽くし、夕焼けよりも赤く染めた。そして、ドロリと血のような赤い液体がローブを来た数十メートルの人型を形成した。
この世界に数多いる剣士ではなく、寧ろ魔法使いを思わせた。その顔は黒くどんな表情をしているのかまるで分からない。
プレイヤー達の戸惑いの声が益々大きくなる。俺はその人型の一つ一つの動きを見逃さないように観察していた。
そんな俺を含むプレイヤー達に意も介さず人型はこう言った。
『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』
私の世界？ 何を言っているんだ、こいつは。まるで自分がこの仮想世界の神とでも言っているかのような……いや、そんなふざけた事を言えるのは一人しかいない。この世界の創造者たる存在だ。
『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる、唯一の存在だ』
茅場晶彦。このソードアート・オンラインの開発者の名前だ。奴ならばこの世界の所有権を唱えても問題がないだろう。まさしく《創造

神》なのだから
『プレイヤー諸君の中には、ログアウトボタンがない事に気付いている者もいるだろう』
この致命傷とも言えるバグの謝罪と説明か？　にしては、やはり様子が変だ。この仮想体では汗なんて流れない筈だが、何故か冷や汗を掻いた気がした。
『これはバグではなく、《ソードアート・オンライン》本来の仕様である』
茅場晶彦が宣言したのは信じられない内容だった。
それが間違いのない事実であると言うかのように同じ言葉を繰り返す。
しかし、何故か俺はその内容を聞いても動揺しなかった。寧ろ、胸の内にストンと収まった。
『よって諸君らによる自発的なログアウトは一切できない。また、外部によるナーヴギアの強制ログアウトも出来ない。もしも外部の人間の手によってナーヴギアが停止、あるいは取り外しが行われた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる』
それは間違いのない事実で茅場晶彦はご丁寧に現実で流れているニュースの映像を浮かび上がらせた。
既に二一三人ものプレイヤーがこの仮想世界から、そして現実世界からもログアウト……つまり■んでいるのだ。
『しかし、充分に留意してもらいたい。今後ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ＨＰがゼロになった瞬間、諸君らの仮想体は永久に消滅し、同時に諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』
それは仮想世界で■ぬと現実世界でも■ぬという事を意味している。そして、他のゲームのようにアイテムや魔法を使って蘇生させるという手段は出来ないという事だ。
（なるほど、茅場晶彦。お前が言っていたのはそういう事か。確かにこれはその通りだな）
ーーーこれはゲームであっても遊びではないーーー

なるほど、確かにこの世界は仮想世界でのゲームだ。しかし、少なくとも今この瞬間から遊びではなくなった。
『諸君らが解放される条件はただ一つ……このゲームをクリアすれば良い。現在君達がいるのは《アインクラッド》の最下層、第一層である。各フロアの迷宮区を攻略して《フロアボス》を倒せば上の階へ進める。第百層にいる最終ボスを倒せばクリアだ』
その内容にプレイヤー達は大反発している。確か《βテスト》でも第十層まで行けなかった筈だ。《ＭＭＯトゥデイ》にそう載っていた。蘇生可能の《βテスト》での約二ヶ月でそれだ。少なくとも同じ層までいくのにその倍はかかると思っていいだろう。
『それでは最後に、諸君の《アイテムストレージ》に私からのささやかなプレゼントが用意してある。確認してくれたまえ』
プレゼント？　このタイミングでは嫌な予感しかしない。が、俺も周りに合わせてアイテムストレージを見てオブジェクト化する。
「手鏡？」
そこに写っているのは現実の俺と全く違うこの世界での顔。まぁ、家の者の顔を参考にしたのでそれは当たり前なのだが。
しかし、いきなり身体が発光したかと思うと同時に、周りのプレイヤーにも同じ現象が起こった。
流石の俺も、これには驚いた。光が収まり目を開けると、そこはさっきと同じ《はじまりの街》の《中央広場》だ。強制転移ではない。
しかし、周りの様子がおかしい。全てのプレイヤーの見た目が全く変わっていたのだ。中には女子から男子に変わってるネカマ野郎もいた。その現象に疑問を抱き、動揺し、驚愕するプレイヤー達。俺も持っている手鏡を見る。
そこには現実の俺の顔が写っていた。
驚きこそするものの別に身元バレを防ぐ為に使っていた顔だった為、大して思い入れなどなかった。寧ろこっちの方がやりやすいぐらいだ。
近くにいた童顔なプレイヤーと趣味の悪いバンダナをしたプレイヤーがこの現象について考察しているのを聞いた。

（なるほど。あの時、何の意味があるのかと身体をペタペタ触ったがこの時の布石か……）

その後、茅場晶彦はこれらの行動についての理由を説明した。そして、

『それではプレイヤー諸君、健闘を祈る』

こうして茅場晶彦によるこの世界のチュートリアルが終わった。全てのプレイヤーがあまりに突然すぎる事態の急変に沈黙する。

（観察する為か……茅場晶彦、お前はこの世界の神だ。認めてやる。お前は間違いなく神だ。けど例え神であろうと……）

ーーー生きているのなら、神様だって殺してみせるーーー

そして、俺の視界に映っていたのは嘆願と悲嘆に明け暮れるプレイヤー達、ではなく彼らにくっきりと纏わり付いている黒い線。それはプレイヤーだけじゃない。《アインクラッド》そのものにも伸びている。

間違いない。この仮想世界にも■は満ち溢れている。

ーーーあぁ、なんて今にも脆くて壊れそうーーー

死観考察

茅場晶彦の最悪なチュートリアルの後、俺はすぐに《はじまりの街》を飛び出し《ホルンカの村》へ向かった。

元々《キークエスト》を放り出して強制転移してしまったのだから。《リトルネペントの胚珠》を手に入れなければならない。この世界がデスゲームとなった今、《レベリング》は必須事項となった。

俺の刃物を収集するという趣味の前に《レベリング》をしなければならなくなった。

既に俺と同じように《はじまりの街》を飛び出しているプレイヤーもいる。間違いなくあいつらは元《βテスター》だろう。このゲームは《ｍｏｂ》のリソースの奪い合い。つまり早い者勝ちなのだ。情報をかなり溜め込んでいる彼らは勝ち組だろう。生き残る為なら手段を選んではいられない。

そして、それは俺もだ。たかがゲームだと。遊びだと思っていた。

ある意味、半分は正解で半分は間違いだったが。

ならば、俺はこの眼を使おう。この仮想世界でも現実と同じく■が普遍的なものだというのなら、この力を使ってやる。

俺は眼の奥に意識を持っていく。すくに脳に熱が溜まる。

そして、世界に■が溢れていた。

《リトルネペント》の身体にも下手な落書きのような黒い線が纏わり付いている。俺はただそれに《短剣》を通した。

ただそれだけの事で《リトルネペント》は分割された。この間、僅か数秒。チュートリアル前ならば倒すのに一分程だったな。

考えている暇はない。すぐに次の獲物を見つけた。

そしてそいつは普通とは違った。俺が探していた《花つき》ではない。

それは《実つき》と呼ばれていた。

（確か、実を壊すと仲間を呼ぶとかなんとか？　まぁ、いい。なら乗せられてやる）

俺は躊躇いもなく実を破壊した。薄緑の煙が現れ、変な臭いがす

る。
すぐに周りの《リトルネペント》がこっちに向かっていた。
俺は《短剣》を構える。
（あぁ、どいつもこいつも■にたがりでうんざりする）
俺は《短剣》の刃を黒い線に入れた。これがこいつらの、データ上の■。
そこは万物が最も壊れやすい場所にして何者も逃れることが出来ない普遍的な■。俺の眼は■が視える。そこに刃を通すだけであらゆるモノが■せる。
ーーーこれがモノを■すって事だーーー

周囲の《リトルネペント》を全滅させた後、いつの間にやら《リトルネペントの胚珠》を手に入れていた。《レベリング》もかなり出来るというおまけ付きでだ。
俺は《ホルンカの村》で《キークエスト》を完了させ、無事に《アニールブレード》を手に入れる事が出来た。
そして、俺はすぐに次の拠点へ走っていた。

俺が視たくもない■が嫌でも視えてしまうようになったのは二年前の十一歳の頃だった。
俺は九歳の頃、ある事故で意識を失い、二年間、昏睡状態だったらしい。
らしいというのはその時の記憶がなく、事故自体も自分の身に起きた実感がなかったからだ。
その昏睡状態から目覚めた後、堪らず両手で眼球を押しつぶしてしまった。理解を放棄したかった。
でも、段々と理解していた。あれは■の線なんだと。
■の線が視れるなんて吐き気がする。うんざりだ。気持ちが悪い。何で俺はこんなにも■が理解出来る？　■がこんなに身近にあるという事実を突きつけられた。
ーーーこんなあやふやで脆い世界ーーー

ーーー地面なんてないに等しいし空は今にも落ちてきそうーーー
歩く事さえ億劫だった。
そうまでなってしても俺は■ねなかった。■が視えるという事はその■の意味を理解してしまったからだ。■が怖かった。
ーーー世界にはこんなにも『死』が溢れているーーー
死が視える眼を『直死の魔眼』と俺は呼んでいる。
この事実を知った時、全てから逃げ出したかった。
生も死も誰も俺を助けてくれない。この仮想世界に来たのも、その死に溢れた世界から、もしかしたら逃れられるという淡い期待かがあるのも事実だった。最もその期待はログインした時点で裏切られたが。
俺をこの魔眼から、この死が溢れたこの世界から救ったのは俺がいた病院の屋上での、とある少女との出会いだった。あいつがいなかったら俺は今頃、世界に絶望していた。
生死があいまいなこの世界で俺は生きる。そして、あいつの元へ帰ってくる、絶対に。

千差異路

第一層迷宮区の最前線に俺はいた。ただでさえ人付き合いが苦手な俺は元《βテスター》である事もあってソロだった。

元《βテスター》の連中が俺の《キリト》という名前を覚えていたら話はややこしくなっていたが。今の所それもない。

このゲームが始まってもうすぐ一ヶ月が経とうとしている。プレイヤーの中にはクリアを絶望視している奴もいると聞く。

これが普通のゲームなら既に上の階層へ行っていただろう。でもこのゲームは遊びじゃない。デスゲームだ。確か既に二千人のプレイヤーが死んだという。全プレイヤーの五分の一……それを多いと見るか少ないと見るかは人それぞれだろう。

だが、俺はそれを多いと感じた。このゲームは一度死んだら二度と復活しない真の意味のデスゲームなのだから。

……辞めだ。ここは最前線だ。こんな思考をしても無駄だ。今は攻略に集中しよう。

俺がそうして迷宮区を探索していると二人の人影をを見つけた。

一人は俺と同じように《短剣》を使って、敵《ｍｏｂ》と戦っている。

もう一人は《片手剣》と《盾》を装備している。が、ただ俺のように黙って見ているだけだ。

何しているんだ、あれは？　少し考えて分かった。

恐らくあの《片手剣》使いは敵《ｍｏｂ》に囲まれ、窮地の所を《短剣》使いに救われたのだろう。

そして、俺は視線を《短剣》使いにやる。後ろ姿で表情は分からないが、かなり強い。敵の攻撃を危なげなく、いや余裕を持って回避している。それでいて本人からは油断や隙といったものを全く感じさせない。

やばくなったら手伝おうと思ったらその時だった。

ただ一振りの攻撃で敵《ｍｏｂ》の身体を分割させた。それは一体に止まらず次々と敵を屠っていく。

俺はこの光景が信じられなかった。
この手のプレイヤーは速さと手数で攻めるタイプなので一撃一撃のダメージは軽いはずなのだ。
しかし、あのプレイヤーに関してはその常識が当てはまっていない。
《片手剣》使いのプレイヤーも俺と同じように驚愕している。
やがてその刃によって敵《ｍｏｂ》は呆気なく全滅させられた。
すると《短剣》使いは《片手剣》使いの方を振り向いて何やら話し始めた。《片手剣》使いは興奮したように話している。
でも俺はそんな事どうでも良かった。あいつが振り向いた瞬間、一瞬こっちを視たのだ。その眼は澄んだ蒼い色をしていた。俺はすぐに目線を逸らした。
あの眼は駄目だ。理由は分からない。でも、勘に近いようなものがあった。あれは俺がこの世界で時々感じさせられたモノ。
ーーー『死』そのものだーーー

見られているな。それも複数。
俺は目の前の雑魚《ｍｏｂ》と戦いながらそれが分かった。この魔眼を見られるのは別に初めてではないし、仮に見られたとしても別にどうでもいい。
俺の背後にいる《片手剣》使いが複数の《ｍｏｂ》に囲まれているのを偶然《索敵》スキルで、通りがかった俺が発見したのだ。
別に放っておいても良かったが目の前で死なれるのは寝覚めが悪い。
俺は助けに入り、すぐに敵を倒してやった。
視線は戦闘が終わるとどこかに消えた。もしかしたら俺の助けに入ろうとしたのかもしれない。そうだとしたら余計なお世話だと言える。
後ろの奴は俺の強さに驚いているようだが、魔眼について教える気はないし、教えたとしてもこの世界のスキルやらではないのだからどうしようもない。出来るのならくれてやりたいぐらいなのだが。

「ありがとうございます！　俺元《βテスター》でもないのに、そこそこゲームしてるだけで、ソロでいけるかもって調子に乗って……迷宮区に潜って……敵に囲まれて……俺、シキさんのように強くなりたいです！」
見た目からだが、恐らく俺より年上の癖に大声で喚いている。
まぁ、借りを作るのは嫌いだが貸しを与えるのは嫌いじゃない。
将来、こいつが攻略組に匹敵するくらいのプレイヤーになるか、彼らが使うような装備を生産できる生産職になるという、万が一の可能性があるかもしれないし。
「はいはい。で、これからどうするんだ？　ここまで帰りに死なれたら俺の気分が悪いし、《圏内》まで送っていくぞ」
「いや、そんなそこまでしてもらうのは悪いっていうか……」
「だったらここで野垂れ死ぬのか？」
「オネガイシマス……」
結局、ここから一番近い拠点になる《トールバーナー》まで送っていった。
「今日は本当にありがとうございました！　いつかこの借りは俺が強くなって……」
まただ。変に目立つのは嫌だから勘弁して欲しい。
「あ、そう言えば俺の名前言ってなかったっすね」
「別にいらん」
どうせもう、会う事なんてほとんどない。
「そんな遠慮なさらずに俺の名前はーーー」
俺はほとんど聞き流していた。ただ、それを聞いて名前負けしてる奴だなと思っただけ。
その後は飯を奢るだの何だのを断り、迷宮区へ再び潜った。

凄い。その一言で尽きた。僕はこの世界で強者と言えるプレイヤー達を何人か見てきた。しかしその誰もが先程、迷宮区で戦っていたあの《短剣》使いに明らかに劣る。なるほど、レベルやプレイヤースキルといったモノが高いのだろう。

しかし、彼、（いや彼女かもしれないが）の真骨頂はそんなチンケのものではなかった。あの蒼く澄んだ瞳は何を視ているのか。敵《ｍｏｂ》をたったの一振りで屠った死神の鎌。

そして、何より戦闘後、潜んでいた僕と視線がかち合った。

その瞬間、僕の本能が逃げろと囁いた。生物なら誰もが持っている生存本能。僕のそれがただ眼が合っただけで警告を鳴らしたのだ。

僕はそれに従いすぐにその場を去った。

（何て奴だ。僕は他の連中とは違うと思ってたけど上には上がいるなんてね……意外とこの世界にも僕の同類がいるのかな。あれは間違いなくーーー）

ーーー『死』の体現者ーーー

僕がこの《アインクラッド》来た理由を他人が聞けばほぼ間違いなくイかれていると言うだろう。何しろ、あの《はじまりの街》でのチュートリアルで僕は内心、ほくそ笑んだのだから。

（茅場晶彦には本当に感謝しっぱなしだよ。これで真の意味での殺人が出来る。動物は何体も解体したけど人はまだやったことなかったからね。今やるのは流石に悪目立ち過ぎる）

そして、美の極限ともいえるあの死神を僕のこの手で犯せるのならば、それはどんな殺人よりも快楽になるだろう。

僕がその『死』を超越した事になる。

それを想像しただけで身体に熱がこもり興奮する。それは僕の人生において何物にも変えられない経験になるに違いない。

容姿は男女の区別がつかない。美少年とも言えるし、ボーイッシュな美少女ともいえる。あんな美を見た事がない。

女ならば犯してやるし、あの美しい見た目なら男でも別に構わない。絶望した表情を視姦した後、あの眼をくり抜いて舐めてから、ゆっくりとじわじわ殺してやる。

そして、僕こそが真の《死神》になってやる。

ーーーそういえば、名前は……《Ｓｈｉｋｉ》だったかなーーー

幕間

俺が第一層攻略という大ニュースを知ったのは、とある女性プレイヤーが迷宮区で倒れているのを見つけ一晩同じ宿で泊まった後の朝の時間だった。

曰く、《フロアボス》を倒したのはソロの《短剣》使い。

曰く、そのプレイヤーは女性で絶世の美女だった。

曰く、そのプレイヤーは男性でこの世の男性と比べ物にならない美少年だった。

曰く、そのプレイヤーは《フロアボス》の並み居る攻撃を全て避け、一撃でボスの身体を両断した。

曰く、そのプレイヤーの《短剣》で《フロアボス》が持つ盾と斧が破壊した。

曰く、そのプレイヤーは聖人で破格の性能を誇るＬＡボーナスを他人に無償で譲った。

その他数え上げればキリがない程、憶測でしかない噂がプレイヤー間で広がっている。

武器が《短剣》でどうやって《フロアボス》を倒すんだよ。しかもソロで。《フロアボス》の硬さだとほとんどダメージが通らないぞ。もしかしたら、第一層のどこかにあったドロップアイテムなのかもしれないが。

俺も《βテスター》として第一層の《フロアボス》と戦った経験があるが、あれはソロでどうにかなる範疇を超えてる。しかもこのデスゲームでならその難易度を一気に跳ね上がる。

数十人でレイドを作り、それぞれ役割毎にパーティーを組んで挑むのが普通だ。

あくまで、俺の予想だが、そいつはパーティーを組んで挑んだのだろう。そして、無惨な事に他の仲間達はボスにやられ、身軽な《短剣》使いそいつだけが生き残り何とか討伐したってところだろう。

しかし、大規模な人数で《フロアボス》に挑んだという話は聞いていない。それならばボス部屋を発見した時点で攻略会議等を開いて

一度、検討すべきだからだ。数人という極少数のパーティーで行ったのだろう。
それでも、俺は元《βテスター》で経験者として《フロアボス》を一人生き残り討伐したという実績は凄いと思う。普通なら一人死んだ時点で逃げてもおかしくはない。少なくとも同じ状況なら俺ならそうするだろう。この世界は生きる事が最重要なのだから。死んだプレイヤー達もかなりの手練れだったのだろう。
それを無念に思うと当時に、ゲームクリアという目標を絶望視していたプレイヤー達に仲間を犠牲にしながらも一筋の光を与えてくれたという事実。
その事を、俺は一人のプレイヤーとして尊敬した。まさしく彼こそ《英雄》の名に相応しいと思う。
ーーーそのプレイヤーの名前は《Ｓｈｉｋｉ》ーーー
しかし、俺のこの勝手な推測は大きく外れていたのだ。

「それで頼んでおいた例の《英雄》さんの情報は何かあるか？」
俺は鼠の髭の理由をアルゴに教えてもらおうとしたが、逆に引っかかり《体術》スキルの為の無茶なクエストを挑む事になり何とか三日でクリアした。
その事について文句を言おうとアルゴを呼び出したのだが、実際は違う。
三日前に全プレイヤーの希望の星となっている《英雄》についての情報を得ようと高いコルを払ってアルゴに頼んでおいた。
「それがあまり芳しくないネ。そもそもどのプレイヤーも《Ｓｈｉｋｉ》というプレイヤーについて知らなさすぎるんだヨ。迷宮区で一人で攻略しているのを見たというのははっきりしてるんだけどネ。彼のフレンドさえいない。《圏外》にいる時以外はどこにいるのかさっぱり分からないから本人に接触も出来ないんダ」
「うーん。噂についてはどこまで正しいんだ？　流石に《フロアボス》をソロで倒したというのは嘘だろう？　そもそもどうして奴が倒したって事が分かったんだ？」

俺自身、《Ｓｈｉｋｉ》というプレイヤーが第一層の《フロアボス》を倒したという事実は疑っていない。問題は情報の出所だ。
「それが《フロアボス》を倒した瞬間にボス部屋に到達したパーティーがいてナ。そこにいた連中から広まった話らしいゾ。で、ここからが肝心なんだが……」
珍しく言い淀むアルゴ。《情報屋》として金を払ったら役割を果たしてくれる彼女にしては珍しい。
「そのパーティーの一人に接触できてナ。どうやら本当にソロで《フロアボス》を討伐したらしいゾ。これはパーティー内のリーダーだった奴が本人に確認している」
「はぁっ!?　んな馬鹿な！」
アルゴの話は到底信じられなかった。あまりの突拍子もない事実に俺は周りを気にせず大声を上げてしまった。アルゴの「シッ」という仕草にハッとなる。
それにしても、あの規格外の強さの《フロアボス》をソロで……？
「《武器破壊》は不明だが、死ぬ瞬間は右腕がなく、円盾を持っていなかったって話ダ」
それが事実なら《チーター》どころの騒ぎじゃない。確かに《短剣》は高いクリティカル率と手数の多さが武器だが……それでもどんなプレイヤースキルをしているんだ？　やはり強力なドロップアイテムなのだろうか。
「まだ話は続けるゾ。そのパーティーのリーダーは《英雄》に『お前は元《βテスター》か？』と聞いたらしい」
「まぁ、そうだろうな。でもそれだったら余計にソロで戦うなんてしない筈だ」
そう、俺たち元《βテスター》は《フロアボス》の強さを知っている。だからこそソロで戦うなんて自殺志願者だ。
「答えは否、だったらしいんダ。それにＬＡボーナスを譲った話ってのも本当らしいゾ。実際は無償じゃなく買い取ったらしいガ。最初は本当に、無料で譲ろうとして流石にそれは悪いからと、パーティーのリーダーが無理矢理買い取ったって経緯があるんダ。またその理

由もとんでもなくてナ。『趣味が合わないから』とサ」
その話に驚きを通り越して、呆れさえ出てくる。
ＬＡボーナスは俺達プレイヤーから喉から手が出る欲しいアイテムだ。彼に装備しないにしてもどこかの商人プレイヤーに高値で売り付けるのがセオリーだ。
「いやぁ、俺には出来ない真似だな」
「オレッチもそうサ。いや、普通のプレイヤーなら誰にも出来ないヨ」
「だろうな」
何というか彼が何故《英雄》と呼ばれているか分かった気がした。俺達みたいな普通のプレイヤーの常識では計れないのだ。
「オレッチが掴んでいるのはこれくらいだナ。何か分かったら連絡するゼ」
「いんや、十分だ。あの噂の真偽が分かっただけでも僥倖ってやつさ……最後にちなみに《英雄》さんは女なのか？」
「にゃハハハ。キー坊もそこんとこ気になるのカ。アーちゃんというとびきり可愛い子がいながラナ！」
「アスナとはそんなんじゃないさ！　ただの仲間さ」
「まぁ、良いサ。で、肝心の《Ｓｈｉｋｉ》の性別は……キー坊には悪いがまだ不明ダナ」
「うん？　実際に会話した奴がいるんだろ？」
「それがどうも要領が得ないんダナ。男だと見れば男に見えるし、女だと見れば女に見えるって話ダ」
「そりゃあ、また……」
俺も童顔で可愛いなんて前に言われた事があったが、同類がいたとは……俺はその事実に少し安堵していた。

孤高修羅

あれから《片手剣》使いと別れた第一層迷宮区二十層に俺はいた。
俺の眼を駆使すれば最速で迷宮区をクリアする事も苦ではない。ただこの眼にも弱点はある。
それは本来、人間ならば視えない『死』が理解出来てしまう俺の脳に負担がかかるという事。
幸いにしてこの《アインクラッド》は仮想世界だ。つまり全てデータの塊だ。その『死』は多少の差はあれど全て均一なのだ。唯一、違うのは現実世界でも稼働しているプレイヤーのみ。
つまり、使いすぎると通常の攻略以上に負担がかかりすぐに疲労が溜まってしまう。
それでも俺は攻略の中で最速らしい。
迷宮区の行き止まりに辿り着いた。いや、正確には行き止まりではない。それは天井まで届きそうな巨大な扉。間違いない、これは《フロアボス》の部屋だ。
（ようやく、辿り着いた。俺の伽藍堂を埋めてくれる存在！）
俺は躊躇いなく《フロアボス》の部屋へ足を踏み入れた。
これまで戦ってきたどんな敵よりも威圧感がある。
二メートルを軽く超えた巨体は血のように赤黒く、隻眼もまた爛々と赤色に爛々と光っている。
そいつは俺を待ち受けていたかのように玉座に座っている。
確か、名前は……《イルファング・ザ・コボルドロード》
そして、その周りにいる取り巻きどもは《ルインコボルド・センチネル》だったか？
恐らく、《βテスター》達がご親切に作成してくれたガイドブックに書いてあった。ボスの欄については適当に見ていたから詳しくは覚えていない。《イルファング・ザ・コボルドロード》は取り巻きを連れ、斧と円盾を構え、突撃をしてくる。
周りの雑魚どもは魔眼がある俺にとって問題はない。すぐに着ている鎧ごと胴体を切断してやった。俺の相手はお前だけだよ。

ーーーさぁ、殺し合おう、コボルドの王よーーー

その時、攻略組トップ層であるディアベル率いるパーティーは迷宮区の攻略をしていた。そして、その作業も半ば終わりを迎えていた。

「そろそろですね。ディアベルさん」

「あぁ、迷宮区も二十層まで来ているし残るは……《フロアボス》だけだ！」

ディアベルの言葉にパーティー内の仲間に緊張が走る。《βテスター》でもある彼はそれを秘密にして攻略していた。もし、それを打ち明ければどんな反応が返ってくるか想像するだけで恐ろしかったからだ。しかし、そんな《βテスター》の彼でも一日でも早くみんなと現実に帰れるように攻略に勤しんでいた。いや、《βテスター》だからこそ。ビギナー達では出来ない事が出来る立場である自分こそ率先して攻略すべきと考えていた。

この迷宮区も攻略も自分達が最速だろう。情報通な《βテスター》達はソロも多くその速度は順調とは言い難い。

とある腕利きのプレイヤーの事が気がかりだった。彼が行った工作も効いていない。それでも自分達は前へ進むしかなかった。

「一旦、部屋を発見したら明日あたりでも攻略会議をしようと思う。みんな、それまで気を抜かないでくれ！」

そのハッパ掛けにパーティー内は再びを気合いを入れ直すのだった。

そして、彼らがそろそろ迷宮区二十層を踏破しそうになった時だった。

「おい、あれを見ろ！」

パーティー内の仲間が迷宮区の一番奥を指差した。

するとそこは巨大な扉が開いた状態の大部屋があり、そこに敵《ｍｏｂ》と一人のプレイヤーが戦っていたのだ。

「あれは……ボス部屋じゃねぇか！　誰が戦ってんだ!?」

迷宮区は《βテスター》と同じ作りになっている。ボス部屋の位置が同じなら恐らくあれは《フロアボス》の部屋だ。

中にいるのは《イルファング・ザ・コボルドロード》とその取り巻きの《ルインコボルド・センチネル》だった筈。
しかし、中にいるのは《イルファング・ザ・コボルドロード》とソロで戦っているプレイヤーらしき人影。
《フロアボス》の強さははっきり言って他の《ｍｏｂ》と比べて桁外れに強い。これが普通のＭＭＯならばただの力試しですんだが、ここはデスケームだ。ソロで挑むなど自殺志願者のする事だ。
彼を助けるか見捨てるか。ディアベルの中でその迷いはすぐに終わる。
「彼を援護するぞ！」
パーティー内で動揺の声がする。確かにこのメンバーで《フロアボス》に挑むのはかなりきつい。いや、はっきり言って不可能と言っていい。ディアベルもその事は理解している。
「無理に倒さなくても良い！　彼が逃げれるだけの時間を稼ぐ！　彼を逃したら俺達もすぐに撤退だ！」
確かに彼を助けても利点はなく寧ろ危険を犯す事を考えればかなり損をすると言っても良い。
それに全てが損な訳ではなくここまで来る程のソロプレイヤーは間違いなく腕利きでそのお礼の報酬も少なくない額にはなるという計算もなくはない。
（元《βテスター》である事を隠している俺が精々出来る事はこれくらいだ……）
ディアベルの言葉に動揺が収まり、みんな決意が固まったようだ。仲間達にその心情を悟られないように《フロアボス》の部屋へ急いで向かった。
しかし、彼らの決意は辿り着く頃には無駄になる。
「なっ！　どうなってんだ、これは……」
ディアベル達が《フロアボス》の部屋に辿り着いた時は既に遅かった。彼らはその光景を信じられないでいた。
駆けつけた時には《イルファング・ザ・コボルドロード》と対峙し

ていた蒼い眼をした《短剣》使いのプレイヤーのＨＰが０になった……のではない。
寧ろその逆だ。《イルファング・ザ・コボルドロード》のＨＰが確認出来る距離まで近付いた時には既にレッドゾーンまで達していたのだ。それも右肘から先がなく、持っている筈の円盾もなかった。
そして、彼らが手を出すまでもなく《短剣》使いがその刃を振るい手を下した。それだけで《イルファング・ザ・コボルドロード》の上半身と下半身を二つに両断した。
そして、その一撃でＨＰが０になり、やがて青いポリゴン片となって虚空に消えた。
《Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！》
そして、彼の勝利を宣言するシステムウインドウが表示された。それがディアベル達が見た光景が間違いなく事実であるという証拠だ。
《短剣》使いは勝利したというのに気怠げで億劫そうに振り返った。何故かその眼は戦闘中は澄んだ蒼色であったのに今は黒色だった。その浮世離れした雰囲気を持つプレイヤーの名前は《Ｓｈｉｋｉ》といった。
「……少し良いかい？」
沈黙が支配したこの部屋でディアベルが辛うじて声を発した。
「うん、何か用か？」
その高い声からは喜色が全く感じられない。
そこで初めてそのプレイヤーの顔をまじまじと見た。美少年とも美少女ともいえる中性的な顔立ちをしている。そこは先程まで死闘を繰り広げていたプレイヤーとも思えない儚さがあった。
「ここに《フロアボス》がいた筈何だが……君一人で倒したのかい？」
その質問の本質は即ち、《フロアボス》に挑んだのは複数人で、生き残ったのが目の前にいるシキというプレイヤーだけという仮説の確認だ。
「あぁ、俺一人で挑んで、一人で倒した。それが？」
億劫そうな態度から彼の言っている事は間違いなく事実だと分かった。

「もう一つ確認だが、失礼を承知で聞くよ。君は元《βテスター》かい？」
規格外の強さを持つ《フロアボス》にソロで勝利するなど元《βテスター》しかいない。最もディアベルはそんなプレイヤーなど心当たりはなかったが。
この質問に仲間達がピリピリとした雰囲気をしていた。
《βテスター》と言えば《はじまりの街》でビギナー達を見捨てたという印象が強いからだ。その事実に胸がチクリと痛むが今はそんな事を気にしてる場合ではない。
「いんや、俺はビギナーだ……そろそろ行っていいか？　第二層のアクティベートしときたいし」
さらに驚きの事実が発覚する。シキは反応を聞く前に、もう用はないと言わんばかりに《フロアボス》の部屋を後にした。
「あ、そうだ。これをやるよ」
第二層への階段を上ろうとするシキは思い出したように、振り返り何かを取り出した。それは防具らしき黒いコートだった。
「俺は防具に興味ないからな。あんた達の方が有効に使ってくれそうだし」
「……これは？」
「さっき戦ったボスのＬＡボーナス」
「なっ!?」
首を傾げながら防具を見る彼らのさらなる驚愕。元《βテスター》のディアベルからすればどれも強力なアイテムであるＬＡボーナスを無料で他のプレイヤーに渡すなど考えられないからだ。
「さ、流石にそれは……」
「良いんだよ。この何とかって防具、俺の趣味と合わないし。無理にとは言わないし、要らないなら他の奴に渡すけど」
たしかにディアベルは《フロアボス》のＬＡボーナスを狙っていた。その為にとあるプレイヤーへの工作をしていたのだが……
（彼はこの防具の価値が分かっているのか？）
説明を見ると、この層で手に入れられる防具では破格の性能を誇っ

ている。
「それはこれの価値が分かった上で言っているんだね？」
「説明なら見た。あんたらもここまで来たんならそこそこ強いんだろ？　だったら下手なプレイヤーに売るよりあんたらが使った方が良い」
そこに嘘偽りがなく、結局ディアベルはその話に乗ったのだった。しかし、ディアベルも年下と思われるシキから無料で受け取る訳にはいかないと、ある程度の金額を払い、買い取った形となった。
シキはごねたが、その決意が強いと分かると渋々受け取った。それでもどこかの店で売った時の本来の金額の事を考えるとかなり割安になったが。
こうして、この《ソードアート・オンライン》が開始されて、一ヶ月になろうとした頃、第一層が攻略され第二層へのアクティベートがされた。
そして、それを行ったのが、ソロプレイヤーであると全プレイヤーに爆発的に伝わった。そのニュースは人々を驚嘆させ歓喜した。
このＳＡＯというゲームの難易度を知っているプレイヤー、特に元《βテスター》達は到底信じられなかった。
それでもほとんどの人々はゲームクリアへの希望を見出し、彼の事を《孤高の英雄》と呼んだ。

徒爾遊戯

第二層で再びアスナとパートナーになって彼女が武器の詐欺被害に遭ってしまった。何とか解決できたものの後少し遅れていれば、間違いなくネズハという鍛冶師プレイヤーに奪われていただろう。

色々事情があったにせよ。彼が剣士として進める道を俺は示したつもりだ。

しかし、俺の、いや俺達の考えは大きく裏切られる事になる。

ーーー《英雄》が第二層《フロアボス》をソロで討伐。第三層のアクティベートが行われた。

攻略組はすぐに会議を開いた。まさかまた《Ｓｈｉｋｉ》がソロで《フロアボス》をを倒すなど夢にも思わなかったのだ。

ディアベルを中心とするキバオウやリンドが所属している《アインクラッド解放隊》は特にこの件を問題視しているようだった。

さらに、その時にネズハがやっていた詐欺を告白。彼らの仲間も謝罪し被害にあったプレイヤーへは弁償をする事になった。最もディアベルは告白してくれた事に安心しており、キバオウやリンド達もそれ以上言う事はなかった。

「問題は彼の件だな」

ディアベルが慎重に話を切り出す。攻略組の面々も分かっているのが頷いた。

「今のまま《フロアボス》をシキだけに任せるという状況はまずい。彼の身にもし何かあった時、《フロアボス》との戦闘がない俺達じゃ危ない」

そう、確かに《フロアボス》は強く戦えば死者が出る可能性がある程だ。ある意味ソロでチート染みたシキが倒してくれるのなら一番安全だ。しかも、ここにいる誰よりも攻略が早いときた。しかし、それは言い方を変えれば《英雄》一人に頼りきっているという事だ。

もし、奴に何かあれば《フロアボス》と戦うのは俺達攻略組になる。だがその時、《フロアボス》との戦闘経験がないのでは危なすぎる。

「せめてソロじゃなくて俺達と歩調を合わせて欲しいんだけどな」

「あかんで、ディアベルはん！　《英雄》だの何だの呼ばれてるイケすかん野郎や！　攻略組に入れるなんて以ての外や！」
確かに《英雄》は俺達と隔絶した攻略のスピードをしている。どんな魔剣をドロップしたのか分からないが、ほぼ一撃で敵を倒しているのだから。
それにもし、歩調を合わせてくれるのなら既にこの攻略会議の場にいてもおかしくないのだ。今、奴はここにいない。つまりはそういう事だ。
「誰か連絡先は知らないの？」
「シキは普段どこにいるのか、誰も知らない。つまり奴はフレンドに誰も登録していないんだ。見掛けても迷宮区で攻略している時だけだ」
「そうなんだ……真の意味のソロって訳ね……」
真の意味のソロか……言われてみると妙にしっくりくる言葉だ。俺も元《βテスター》としてソロを貫こうと思っていたが、こうしてアスナとペアを組んでいる。
「仕方ないな。この中で、次シキに会った人は必ず攻略会議に参加するように言ってくれ」
ディアベルのその言葉で会議は締めくくられた。

だが俺の運は変な所で強いらしい。　第三層の《圏外》のフィールドにいた奴は、《英雄》はいた。
「キリト君……！」
「あぁ、間違いない」
《短剣》を使って敵《ｍｏｂ》を一掃するその姿は見ていて清々しい程だ。
助けがいるようには思えず、特に隠れていた訳ではないので、戦闘が終わると俺達に気づいたようだ。あの戦い方どこかで見たような……確かあれは第一層の……
「何？　何か用か？」
俺が前に見た記憶を辿っているとシキは俺達に近づいて来た。な

るほど、確かにこれは性別の区別がつかない容姿だ。隣にＳＡＯの中でもトップクラスに綺麗な女性プレイヤーがいるが、この目の前のプレイヤーはまた違った和風美人といった見た目だ。そして、その気怠げな表情と浮世離れした雰囲気が変な所でその魅力を掻き立てていた。

本当に《フロアボス》をソロで倒したのだろうかと思わず疑ってしまった。

「《英雄》のシキだな？」

「そう呼ばれてるらしいな。あんたは？」

「俺はキリト。でこっちは……」

「アスナよ」

「キリトにアスナね……俺に何の用だ？」

気怠げな態度は相変わらずだったがその視線は鋭く真っ直ぐ、俺の方へ向いていた。

「単刀直入に言うぜ、《英雄》さん。あんたのソロで《フロアボス》討伐をやめて欲しい。出来れば俺達の攻略と一緒に来て欲しい」

「何だ、そんな事か……まぁ、断る」

「理由を聞いても……？」

間髪容れない返事。期待はしていなかったので驚きはない。ただ隣の剣士様が凄く不機嫌オーラを醸し出し始めましたが。

「だって、俺があんた達に合わせて意味あんの？」

それを言われると辛い。確かにシキからすればソロでやる方が足手纏いがいなく、最も効率良く攻略出来るのだ。わざわざ自分からそんな事をする必要がない。

「もし、あんたに何かあれば俺達は《フロアボス》の戦闘経験なしで挑む事になる。それは危険すぎるんだ」

シキは俺の話を聞いて何か考える仕草をした。やはり、一人で挑むのはリスキー過ぎると判断したのか。

「分からなくもない。けど俺は今のままで行くつもりだぜ。聞いてる限り俺に利点ないし」

やっぱりな。アスナを見てみると理解出来ないという表情をして

いる。それが当然の反応だ。
あまりしたくないが、やるしかないか。そもそも断られる可能性があるが。
「……なら俺と《決闘》しないか？」
「……《決闘》？　へぇ……」
意外にも悪くない反応だ。これはいけるかもしれない。
「勝った方が出来る範囲で互いのお願いを聞くって事で」
ここで制限を付けとかないと色々まずい。それにソロで《フロアボス》を倒す程の実力者だ。対人戦闘はまた別の技能が必要だしな。ここでは多くはないとはいえ元《βテスター》の俺の方が分がある。
「悪くないな。乗ったぜ。ここだと危ないから《圏内》な。もちろん、人目に付かない所で。あぁ、そこの人は別に構わないぞ」
立会人を付けるつもりだ。俺も考えていたから問題はない。俺はアスナに目線で訴えると、もちろんと言わんばかりに頷いた。

という訳で俺達は、ある程度《圏内》でスペースがあり、且つ人目が付かない場所へ移動した。
「ここならあまり人も来ないし、ちょうどいい」
「あぁ、悪くないな。どれでするか……《ノーマルモード》で、いいか？」
なっ！　こいつ本気か？　あまりの衝撃に絶句してしまった。
ゲーム内における正式な決闘方法であるデュエルには、三通りのモードがある。
一つ目は《初撃決着モード》。
初めの一撃を決める。または、相手のＨＰを半分以下にすると勝利するこの方法には敗北しても死なない。このデスゲームではこれが用いられるのが普通だ。
二つ目は《時間制限モード》。
文字通り互いに時間を決めて、時間切れの時点でＨＰが多く残っていた者が勝利となる。しかし、相手をＰＫしても勝利となる。安全を確保するのなら《初撃決着モード》の方が良いに決まってる。

そして《ノーマルモード》通称《完全決着モード》。
相手のＨＰを０にするまで終わらない。ＰＫをするか、相手が『リザイン』つまり《降参》するまで戦い続けるのだ。あまりにも危険すぎる為に今まで一度も使われることもなかった筈だ。
シキのその態度はあまりにも自然すぎた。本気で言ってるのだろうか？　こいつの何か期待しているような声色から冗談とは思えない。そんな押し黙る俺の反応にシキは、
「なぁんてな。冗談だよ。気負いすぎなんだ、お前。これから《決闘》だってのにな」
えっ……冗談？
その言葉に呆気にとられた。シキはやれやれと言わんばかりに苦笑している。
「な、何だよ。脅かすな。本気かと思ったぞ」
背ろにいるアスナからも安堵した雰囲気が分かる。流石に攻略でもない場面で死ぬのはごめんだ。シキはメニューを操作している。
「《初撃決着モード》でいいよな？」
俺は当たり前だと言わんばかりに頷いた。しかし、今のこいつのやり取り、本当に冗談だったのか？　俺にはこの物臭そうなプレイヤーが本気で言っていたように思えてならない。
だって、シキが質した時の俺の反応に、こいつは一瞬、ほんの一瞬だけ残念そうな表情をしていたのだからーーー
俺は《決闘》の申請を受け承諾。カウントダウンが始まった。六十の数字が刻一刻と減っていく。
その間、シキのあの億劫そうな表情が消える事はなかった。これから《決闘》だってのに。ただ自然体に、なんの気負いもなく、いつも通り面倒臭そうに《短剣》を構えた。
俺はそれから目を離さず、じーっと見ている。
そして、
《ＤＵＥＬ》の文字が浮かび上がり、俺と《英雄》の《決闘》が始まった。
勝負は一瞬だった。俺は《剣技》《スラント》を発動させる為、構え

を取った。
が、シキはそれを見透かしたようにただ後ろへ下がった。《剣技》を避けたのか？
俺の驚愕なぞ知らんとばかりにいつ反応出来たのかシキは一瞬で俺の左隣にまで距離を詰めていたのだ。
「なっ!?」
しかし、俺より圧倒的な《ＡＧＩ》を全力で駆使して俺の左隣に距離を詰めたのだ。
そして、死角からの攻撃。
俺はただ反応出来ず、肩へ一撃を受けた。それは全く痛くもない軽いものだったが、《初撃決着モード》では敗北となる。
《ＷＩＮＮＥＲ／Ｓｈｉｋｉ　試合時間／８秒》
目の前には《決闘》の結果を示す巨大なウィンドウが浮かんでいた。
「これで俺の勝ちだな」
ただ、淡々と結果を告げたシキは相変わらず気怠げだった。
《決闘》で勝利したシキは次の事を俺に告げた。
一つ目、俺の行動を邪魔するな。
二つ目、俺に構うな。
ただそれだけだった。つまりそれは、今まで通りお互いの領分を守りましょう、という事だった。
アスナは何か言いたげだったが、《決闘》の結果だった。俺が負けたのが悪い。甘んじて受け入れた。
「でも、これから他の連中があんたを見つけたら今日の俺みたいに接触してくるぞ」
「ふん。だったら返り討ちにしてやるよ」
だろうな。その態度は当然と言わんばかりだ。こいつの実力はＳＡＯの中でもトップクラス、いや最強と言っても良い。
《決闘》では誰も敵わないだろう。
それから何人かの攻略組が《孤高の英雄》に《決闘》を挑んたという話を鼠から聞いたが、その全てを返り討ちにされたという話だった。

そして、第三層《フロアボス》がシキ一人によって討伐された。

再会別離

順調にシキは真の意味のソロで攻略を進めていったらしい。
彼一人で第三層～第五層の《フロアボス》を倒してしまった。
その間に俺とアスナはコンビを組んだまま、《キャンペーンクエスト》をして黒エルフのＮＰＣのキズメルと行動をともにした。
さらにディアベル率いる《アインクラッド解放隊》を分裂させようとして俺も《決闘》で殺そうとしたモルテというプレイヤーとの戦い。
アスナと乗った《ティルネル号》での冒険。
第四層での《キャンペーンクエスト》におけるエルフ達との戦い。
ＰＫという最悪の行為を何とも思わないプレイヤーの登場。
様々な事があったが、その中で俺はアルゴにシキの情報を集めてもらうように頼んでいた。そして、その中で驚愕の事実が発覚した。
ーーーシキがＰＫをしているーーー
確かにシキは独断専行より酷い攻略をしており《ＬＡボーナス》も独り占めをしていると言っても過言ではない。
さらに第五層のゴーレムの《フロアボス》の《ＬＡボーナス》がこれまた曲者で「ギルドのリーダーが地面に突き立てるとその半径１５メートルの範囲にいるギルドメンバーのステータス値が上がる」というとんでもなく強いアイテムだったのだ。
それをシキは第六層に進んでから突然、俺達攻略組の前に現れ、多少親交のあったらしいディアベルにあっさり渡したのだ。
「これは俺にいらん。あんたギルド作ってんならやるよ。あぁ……どうせならこいつらの処分も頼む」
そう言うと、どう見ても《フロアボス》や簡単には手に入らないドロップアイテムをいきなり取り出しては無償で譲ると言い出したのだ。
「ちょ、ちょっと、待ってくれ！　こんなレアアイテムを一遍に譲ると言われても……」
「なら言い値で良いよ」
俺達が呆気に取られる中、

「貴方は何を考えているの？　《フロアボス》を独断専攻で倒すかと思えばアイテムをあっさり渡す。私、いやここにいる皆が貴方の考えている事さっぱり分からない」
アスナが口に出した。それが始まりでシキのＰＫ疑惑を糾弾する声も上がった。いくら《英雄》とはいえまだ表だったＰＫは行われていない。それをしているかもしれないプレイヤーが目の前にて恐怖を感じるのは当たり前だった。
ディアベルが何とか抑えたが、キバオウなどは声を荒げている。俺のようなソロプレイヤーでさえ好かれていないのに、さらにその下を行くシキを嫌悪するのは当然だろう。それらの反応はシキは、
「別に。ただ俺は《フロアボス》を一騎討ちで倒したいだけ。アイテムをやるのは本当に俺が要らないだけだ。前にも言ったけど、別に他の奴に売ってもいいしな。後、ＰＫに関しては本当だ」
何だと！
俺は動揺と驚愕が半々だった。《英雄》と呼ばれたシキがＰＫ……信じられなかった。だがあの枯れた態度と一致しない異常な強さを考えてるとどこか納得している俺がいたのだ。
「おい、本当にお前……ＰＫを……」
「こいつ……本当に」
攻略組が騒つく。そしてすぐに糾弾の声が上がった。中にはすぐに殺すべきや黒鉄宮の牢獄に入れるべきという声もあった。それらをディアベルは抑えてシキに問うた。
「シキ君。君ほどのプレイヤーがＰＫをするなんて何か理由があるんじゃないかい？」
ディアベルはシキに大きな借りがある。シキはそれを貸しなんて思っていないだろうが。
「当たり前だろ、そんなの。俺が殺したのは三人。あいつらは俺を襲ってきたんだよ。それで反撃して思わず本気出したら殺しちまった」
「それは……本当かい？」
「あぁ、あいつら俺だと知らず攻略組と勘違いして数を使って強盗で

もしようとしたんだろ。そんな命を背負おうとしない奴なんか死んでも仕方ないんだよ」
シキの言葉に場が静まり返る。この世界で表だってＰＫ行為やそれに準ずる行為は行われていないが裏では既に進んでいたのだ。この世界の不文則としてＰＫにＰＫで返しても罪に問わないとなっている。正当防衛でそうしないと死んでしまい元も子もないからだ。
でも、それが分かっていて、尚のこと殺せる奴なんてそうはいない。殺すより難しい捕縛を選ぶだろう。俺もそうする。しかし、この《英雄》は違う。
ＰＫをするならＰＫで返す。つまり殺しなら殺しで対応するという事。それも気負う風でもなく、ただ当然の権利として告げた。
そして、そのままシキのＰＫの処罰は流れてしまった。流石に正当防衛なら咎めよう奴は少なかった。少なかったという事は中にはいたのだが。そいつらはシキが脅しをかけるとすぐに黙った。
「うっせー。なら俺と《決闘》してもいいんだぜ。《ノーマルモード》でな？」
その一言で反対意見は消えてしまった。そして、シキは驚くべき事を告げた。
「しばらく俺、《フロアボス》と戦わないからな。あんたらが望んだ《フロアボス》討伐戦がようやく叶うぜ？」
またもや、爆弾をこの場に投げ込んで来た。
「シキ君、それは君がこの先《フロアボス》を手を出さないという事かい？」
「あぁ、そうだ。勘違いしてもらっちゃ困るから言うけど、あんたらの事を手伝う訳じゃない。ただしばらく《フロアボス》から手を引くってだけだ」
だろうな。シキの性格からして間違っても攻略組と足並み揃えるなんてしなさそうだ。攻略組の面々もシキにあまり良い感情を持っていないしな。
「じゃあ、俺はこれで」
それだけ言い残すとシキは攻略会議を後にした。

そして第六層からシキは《フロアボス》討伐戦に出てこず、俺達攻略組が倒していった。初めての討伐戦はみんな緊張していたが充分に安全マージンを取っていたので死者を出す事なく勝利した。

何を考えている、俺。今は第九層の攻略だぞ。ここにはいない奴の事なんてどうでもいいだろ。第九層《フロアボス》の討伐に喜ぶプレイヤー達。だがそこに《英雄》の姿はいない。

（シキ、お前は一体何を考えている？　今、何をしている？）

その問いに答えられる者は一人を除いて誰もいない。

死神降誕

第十層《フロアボス》を討伐会議の中、あいつは再び俺達の前に姿を現した。

「会議中、邪魔して悪いな」

《孤高の英雄》シキだ。俺たちに姿を見せるのは随分、久しぶりだ。攻略組のプレイヤーは騒つく。良い意味でも悪い意味でも《アインクラッド》中の有名人。鼠から聞いた話だと、下層プレイヤーの中にはシキを神聖視する集団も出始めたらしい。

《フロアボス》を単独で倒す実力とその美貌、そしてＰＫを躊躇ず行うその心の強さ。それらに憧れるプレイヤーがいるようだ。

あの第六層の会議以降、姿を見せなかったが今更何の用なのか。

「なんや、自分！　今更ワイらに何の用や！」

やはり最初に噛み付いたのはキバオウだ。今にも遅いかからんばかりの勢いだ。リーダーのディアベルが手で制した。

「この第十層の《フロアボス》は俺一人が倒すぜ」

こいつ……！　まだそんな事を！

「……理由を聞いても？」

混乱しているプレイヤーの中、ディアベルは冷静にシキに質問した。隣にいるアスナは俺のコートの袖を掴んでいる。

「前にあんな事、言った手前悪いんだけどな。他の層の《フロアボス》より第十層のはもしかしたら強いかもしれないんだろ。ならそいつは俺が倒す」

「つまり君は《フロアボス》と一騎討ちで戦いたいという事か？　どうしてそこまで一騎討ちに拘るんだ。俺達と戦った方が安全だ。危険は少ない方が……」

「うるさいな。別に今すぐ迷宮区に行って《フロアボス》の部屋へ殴り込んでも良いんだぜ？」

俺はその言葉にシキの本性が一部見えた気がした。

こいつは恐らく、生粋の戦闘狂という奴なのだろう。この《アインクラッド》という死ぬかもしれない異常な世界の中でそれを全く物怖

じしない生き方は……少なくとも俺には出来ない。他人を全く寄せ付けないその雰囲気は抜き身の剣のようだ。
「それをしないでここに来たのは曲がりなりにも前にあんた達に言ったからな。《フロアボス》をしばらく倒さないって。一応、その義理を果たす為にこんな所に来たんだ」
その不遜な態度に攻略組のプレイヤーはついに爆発した。
「ふざけんな！」
「《英雄》とか呼ばれて調子に乗ってんじゃねぇぞ！」
「この人殺し野郎！」
ディアベルが抑えるように命令するが場は収まらない。元々嫉妬深いネットゲーマー達だ。シキの実力を妬んで溜め込んでいても仕方がない。でも……
「ならまた《決闘》で決めるか？　なんなら数人でかかって来いよ」
威圧、いや殺気を込めた視線でプレイヤー達を睨みつけた。それだけで場は静まり返った。
何で、こんな奴がこの世界に……
ＰＫをするかもしれないプレイヤー……あの黒ポンチョの男のような奴がいるというのに。シキという異常な強さの実力者相手が本気でＰＫをしたらどうなるのか……
「やろうって奴はいないのか。前に俺と《決闘》した奴は覚えているだろうがな。俺の行動を邪魔するな。まぁ、第十層が終ったら俺も大人しくしとく。あんたらの邪魔はしないよ」
俺は拳を握り締めていた。そうだ。シキのなすがままにされているのはその強さのせいだ。俺達で到底敵わないそれ。
俺がもっと強ければ……
強くなってやる……いつかお前に追いついて……
プレイヤー達の反応がないのを見るとシキはすぐにその場を去って行った。第六層の攻略会議の再現だった。
その翌日、シキが第十層《フロアボス》を単独で倒し第十一層のアクティベートがされた。
その後、彼の新たな異名が広まった。

ーーー狂戦士ーーーと

大した事なかった。

俺が第十層の《フロアボス》を倒した後思った事だ。

一応、一つの区切りになる第十層の《フロアボス》は強敵になると思ったのだが……当てが外れた。

次の俺の狙いはクォーターポイントになる第二十五層だ。それまでは《フロアボス》に挑む事はない。この世界の《フロアボス》は俺にとって大した事なかった。俺が持つ死を視る魔眼はこの世界にとっては規格外すぎる力だ。その分、かなり負担も大きいが。それもこの世界での魔眼の制御も出来るようになってきた。

《フロアボス》と戦わないとなると俺はどうするのか。さらにその上の敵と戦えばいい。《フロアボス》よりも複雑に動き、それらよりも的が小さく且つ実力がある敵。

それはプレイヤー達だ。とそれも《決闘》ではない。俺が生きてる実感を抱く為には温い《初撃決着モード》や《時間制限モード》じゃ意味がない。つまり真の意味の殺し合い。

しかし、そんな簡単にＰＫなんて出来るわけがない。何もしていないグリーンなプレイヤーを襲うなんて俺の理に反する。

殺されても誰も文句を言わない連中。俺が狙うのはオレンジプレイヤーだ。情報屋から買い取った話では集団でＰＫやＭＰＫをしているようなプレイヤーも現れ始めたらしい。

かといって俺が直接そのプレイヤー全員に殴りこむのは悪目立ちすぎる。さらにステータスを上げる為にレベリングも必要だ。俺の現実世界での技術をこっちの世界でも使えるようにしておきたい。

使い分けなくてはならない。一プレイヤーの《Ｓｈｉｋｉ》としての顔と殺人者としての顔を。

オレンジの情報は情報屋から買えばいい。情報屋から俺の情報を抜き取られるリスクも万全にする為ほとんどない。準備は既に整っている。

ーーーさぁ、殺し合うか。オレンジども。

しばらくして《アインクラッド》の裏、特にオレンジプレイヤー達の間でとある黒い噂が流れた。
ＰＫをしているとどこからともなくＰＫＫプレイヤーが現れ殺されてしまう。
白い仮面に白い和服を着ており、さながら暗殺者のように《短剣》を操り例外なくオレンジ達の命を刈り取られる。
奴はこれまでオレンジ達により不遇の死を遂げたプレイヤー達の代行者。奴はこう名乗った。
ーーー其は例外（オレンジ）を許さぬ死神なりーーー

「ここまでが最近裏で流行ってる《死神》についての噂ダヨ、キー坊」
「……何というかツッコミどころ満載じゃないか、それ？　そもそも全員死んだのにどうやって《死神》？とやらの格好が分かるんだよ」
「オレンジで襲われた奴の中に生き残りがいたんダ。ま、その《死神》とやらに見逃されたって方が正しいかもナ」
じゃあ、ダメじゃないか。《死神》とやらも随分と噂が一人歩きしたもんだ。
「そいつは今どうしてる？」
「黒鉄宮の牢獄にいるヨ。《死神》を怖れて自首したそうダ。そいつ以外にも何人かいるが結局は分からずじまいだナ」
オレンジに恨みがある奴の犯行なのか。でも躊躇いなく殺しが出来る精神。さらに攻略組に並ぶ強さ。何者なんだ？　攻略組にそんな事をする奴はいない。それをするぐらいなら少しでも迷宮区を踏破しようとするだろう。
「まさか本当に《死神》って訳じゃない。もしそうなら……」
第一層でビギナー達を置いていった元《βテスター》の俺も恨まれても仕方がない。もし、その《死神》が現れたなら俺は……
「キー坊？」
「あぁ。いや、なんでもないさ。どんなカラクリがあるんだろうなって思ってな」

「うーん。《死神》に関しては深く考えない方がいいと思うゾ。奴はオレンジばかり狙ってグリーンには手を出さないからナ。中にはＰＫをしたら《死神》が来るって事で抑止力になってる部分もあるんダ」
「でもグリーンを狙わない保証がない」
「……その時はまた対策を立てればいいだロ。《死神》の事ばかり考えても仕方がないサ」
「……そうだな」
そうだ、アルゴの言う通りだ。あまり《死神》ばかりに捕らわれるのはおかしい。俺はゲームクリアを最優先にする攻略組なんだから。
だが、もし……
《死神》が俺を、アスナを襲った時、俺はシキのように……　プレイヤーを殺す事が本当に出来るのか……？
俺はしたくもない想像をしながら、グッと右手を握り締めていた。

殺人記録Ⅰ

「クソッタレが！」

目の前の数体の《ｍｏｂ》どもに囲まれながら一人でそう叫んでいた。

最前線の迷宮区で他のプレイヤーが来る事を祈りながら《片手剣》と《盾》を構える。じわじわと追い詰められている。命がなくただ与えられた命令をこなすだけの《ｍｏｂ》に俺は殺される。

攻略組でもない俺が、狂ってるという言葉がふさわしいあいつらから逃げた果てが、この最前線の迷宮区だった。

攻略組でもない俺がこんな場所は場違いだ。中層プレイヤーとまではいかないが、準攻略組とも言えないレベルだ。この世界と戦おうとする攻略組でもなく、受け入れようとする中層プレイヤーでもない、まさしく半端者。

こんな場違いな場所に来たのは、俺が犯した罪を考えれば、ここで攻略組の真似事をして死んだら少しでも償えると思ったからなのだろう。それに温い中層プレイヤーとは違うと思いたかった。ここでなら死ねると思った。この世界に囚われた人々に貢献したかった。俺の命はそれぐらいの価値があると思いたかった。

これが夢なら――早く覚めろ――

ＨＰがレッドまで達している。命がなくただ与えられた命令をこなすだけの《ｍｏｂ》に俺は殺される。ここまでか。呆気ない。

――あぁ、終わりか。

「――あぁ、終わりか」

抵抗する気も失せて持っていた。《片手剣》と《盾》を下げようとする。その時だった。

何が俺の目の前を横切り、そして、《ｍｏｂ》があっという間に消えた。それが引き金となって他の《ｍｏｂ》どもも次々と切り裂かれていった。やがて全ての《ｍｏｂ》が青いポリゴン片となってしまった。

「大丈夫か、お前？　攻略組なら引き際ぐらい弁えろよな、全く」

そう言ったのは墨汁よりも黒い髪と瞳。深い藍色のライダースー

ツのような服を着た中性的な少年だった。いや、口調が男勝りなだけで女なのもしれない。どちらにしても俺の短い人生の中で見た事がない程の美形だった。

こんな奴があれだけの《ｍｏｂ》を？　それも最前線の迷宮区の？　いわゆる本当の攻略組なのか、こいつ。

「お前、結晶あるよな？　とにかくアイテム使ってさっさとここから消えた方がいい」

そいつはさっきの戦闘は嘘のように憂鬱そうな雰囲気を漂わせ始めた。一方的にそう告げると俺に背を向けた。やっぱり攻略組か。それもソロの事を考えたら最上位だろう。あの強さなら納得出来る。

俺がいた場所より奥に去って行った。

この後、こいつは迷宮区を攻略して俺の事など記憶の彼方に消えていくのだろう。このデスゲームをクリアする為に。あんな強さがあるのなら……もし、俺に……

「ちょ、ちょっと待ってくれ、お前」

俺はポーションを飲む事も忘れてそいつを呼び止めていた。何言ってんだ、俺？

「ん？　何だ、《圏内》までのボディーガードならしないぜ。結晶くらいあるだろう」

呼び止められても驚くような反応もせず気怠げな様子は変わらなかった。

「ち、違う……」

俺は何を言おうとしている？　何が言いたい？　とにかく一人にして欲しくなかった、今は。

「お、俺はお前みたいな攻略組じゃない。結晶を使うのはもったいない。だから《圏内》までついてきて欲しい」

厚かましい事を言う俺にそいつは訝しげだった。確かにこんな場所にある攻略組以外が来るなんて死にたがりか馬鹿しかいないだろう。それに俺が《圏内》に戻ったらあいつらに……

「お前、攻略組じゃないのか。だったら俺と同じだな。死なれたら寝覚めも悪い。前にもこんな事あったしな。ついて行ってやるよ」

あっさりＯＫされ、呆気に取られてしまった。それに攻略組じゃない？　あの強さで？
「お前、攻略組じゃないのか？」
「どうだって良いじゃないか、そんな事。それよりさっさとポーションでも何でも良いから飲め」
俺はアイテムストレージからポーションを取り出して飲んだ。たったそれだけでＨＰがグリーンへと戻った。ＨＰは赤から緑に簡単に戻るのに……俺の中のオレンジは決してグリーンにはならない。
「おい、行くぜ。えーっと、キース？」
俺がぼーっとしていると俺の名前を呼んでそいつが振り返った。
そいつが俺の名前を口にした事が何故か意外に感じたのだ。そして俺の中で小さな喜びがあった。
その時に初めて俺はそいつの名前を見た。
そこには《Ｓｈｉｋｉ》と書いてあった。
あぁ、俺はその名前を知っている。知らない筈がない。
ーーーだって俺はその《孤高の英雄》に憧れていたのだから。

《圏内》までの道のりはそこまで遠くない。俺のようなへぼいプレイヤーはそこまで深く迷宮区に潜り込めなかったからだ。
やってくる《ｍｏｂ》は全てシキが倒した。《索敵》スキルが高いのか。《ｍｏｂ》が出てくるたびに俺を下がらせ一人で突っ込んでいく。見ているこっちがヒヤヒヤさせる。でも、一度戦闘が始まるとそんな不安もどこかへ消えていく。
どんな反応速度をしているのか。《短剣》を使って敵の攻撃をギリギリでかわしその隙を突いて攻撃を入れたり、死角へ移動して《短剣》を振るったり、まるで暗殺者のような戦い方だった。
でも、その容姿と相まって俺はその光景に見惚れていた。芸術的ともいえるその戦いは俺の目を捉えて離さない。シキは喜色も見せず、ただ面倒臭そうに落としたアイテムを回収すると、ただこちらをチラッと見て歩き始めた。俺もこの反応も慣れたので黙って付いていく。

「なぁ、キース」
歩きながら俺を呼んだ。初めてだ、シキの方から話しかけたのは。
「お前攻略組でもないのに、何であんなところいたんだよ」
俺からすれば訊かれたくない事だった。それを言えばどんなお人好しでも俺を遠ざける。《圏内》にいてもあいつらがいる。あいつらは地の果てまで裏切った俺を追いかけてくる。俺はあいつらから、全てから逃げて、迷宮区で死に場所を求めたのだから。
でも、シキになら何故か話せると思った。
受け入れてくれそうな気がした。それに受け入れられなくても、こいつになら殺されても良い。そう思った。
「今、ここで話したくない。聞かれたくない事だから」
「へぇー、じゃあ、どこで話すんだよ」
「宿屋だよ。お前が使ってる所でも俺が今日使う所でも良い」
「悪いけど俺、宿屋じゃなくて自分の寝ぐら持ってるしな」
「えっ……そうなのか」
「正確には一部屋買借りてしかいないけどな。そこでいいか？」
「あ、あぁ」
そうして、俺は成り行きで憧れのプレイヤーの部屋に転がり込んだ。

シキの部屋には人が住んでいる生活感というのがまるでなかった。
ベッドもなく、机も椅子もない。思わず空き家かと思ってしまった。シキは躊躇いもなく入って行った。
「ほら、入れよ」
俺はその何もない殺風景な部屋に落ち着かなかったが、シキがさっさと聞かせろと促すとそこに座り込んだ。
「でも、その前に一つ聞いていいか？」
そうだ、話をする前にこれだけは聞いておかないと。
「何だよ」
「お前、オレンジプレイヤーについてどう思う？」
予想外の質問だったのか、シキの端正な顔つきはキョトンとした。

珍しいものが見れた。
「オレンジねぇ。嫌いだけどな。それだけだな。強いて言うなら俺の殺しの対象」
そう平然というシキに俺は背筋がゾッとした。オレンジは殺しの対象……それはそうか、でも……
「……もし俺がオレンジだって言うならお前はどうする？」
すると、シキは今まで俺の事を何とも思ってないような視線から興味の対象へと変えていた。
俺自身はグリーンだが、ＰＫをするにあたってオレンジじゃなくてもＭＰＫをしたり《圏外》までグリーンの囮役として獲物を連れ出して仲間に襲わせるなどは出来る。カルマクエストなんかもこなせばオレンジからグリーンへと戻れる。
「俺はこの世界で人を殺したんだ……」
「そうは見えない」
「本当だ。既にＭＰＫで１１。囮役で５人殺して１人を直接殺した。俺は人殺しだ……」
俺の犯した罪を聞いても動じる事がない。ただへぇと呟いただけだ。逆にそれが俺を不安にさせた。
「お前、驚かないのか？」
「俺も同じだからな」
こいつ、何を言っている？　いやでもさっきこいつはオレンジを殺しの対象だと言った。それは言い方を変えれば、普段からオレンジを……
「お前、それどういう……」
「今は俺の話じゃないだろ。お前の話だ」
シキに言われて初めてここに来た理由を思い出した。そうだ。俺はこの何もない部屋に自分の話をしに来たんだ。
ここはまるで今の空っぽの俺みたいだ。
俺がした事を思い、話すのを躊躇しかける。汚れた俺の話なんかシキに聞かせても良いのか？　興味深々といった感じで俺を眺めている。

するしかない。俺が言い出した事だ。グリーンにもオレンジにもなり切れなかった半端者の何の価値もない話。

「あいつと出会ったのはこのクソゲーが始まったあの日だった」

これはそんな無価値な俺の『殺人』の『記録』。

殺人記録Ⅱ

現実世界での俺の居場所は元々、どこにもなかった。
俺の両親は幼い頃に事故で死んで、俺は親戚の家に預けられた。
しかし、俺の扱いは腫れ物を扱うようだった。いつも飯は一人。親戚には子供がいたので、そいつからいじめに近い事もされていた。俺はただただ無価値だった。
そんな俺が心の拠り所にしたのがＭＭＯだった。ここでなら実力があれば俺の存在を認めてくれるからだった。俺が生きている価値があったのだ。
元々、俺がこのゲームを始めたのは《βテスター》に当選した同じ高校の唯一と言ってもいい友人に誘われたからだった。
俺は他のＭＭＯも一緒に遊んでいたのでこの世界初のＶＲＭＭＯ《ソードアート・オンライン》にも無論、興味があった。俺は友人に誘われ、高すぎる倍率をくぐり抜け、バイトで金を貯めて何とか購入まで漕ぎ着けたのだった。
サービス開始日、ログインしてから俺は元《βテスター》の友人にモンスターとの戦い方や《剣技》の仕方などレクチャーを受けていた。
しかし、あのチュートリアルによるデスゲーム化で事態は一変。俺はどう動くか、何が最善か、全く分からなくなっていたのだ。俺のようなビギナーは中央広場に溢れて返っていた。でも、友人は俺を見捨てなかった。他の元《βテスター》達が次々と《はじまりの街》を飛び出して行っていると聞いた。
俺もＭＭＯをしていたのでリソースの奪い合いの仕組みは良くわかる。俺一人程度なら守りながらでも戦えると言った。
俺はその手を取った。他のビギナー達に罪悪感が少し湧いたが生きる為に仕方ないと割り切っていた。
二ヶ月後には攻略組と呼ばれる連中とも張り合えるレベルまでになって行った。でも第一層は突破されない。
俺は焦っていたんだと思う。それと同時に友人と《はじまりの街》に置いていったビギナー達への罪悪感があり早くこのゲームをクリ

アしなければならないと思っていた。俺の価値を証明したかった。
そんな時、後に《孤高の英雄》と呼ばれるプレイヤーによる第一層の単独《フロアボス》討伐の知らせを聞いた。
俺と友人は驚いた。特に元《βテスター》の友人の反応は凄かった。話を聞いている限りそんな事は少なくとも《βテスター》の時には不可能だったらしい。
俺はそんな《英雄》に憧れた。いや、俺以外のこの世界に囚われたプレイヤーはみんな憧れただろう。中には嫉妬や僻みで攻撃した奴もいたかもしれない。
それでも、俺は憧れたんだ。第一層から第五層までを一人でクリアしたその強さと在り方に。
俺は負けないように思った。何より俺と一緒に居てくれた友人にそう誓った。
これからも二人で強くなる。友人は俺を必要としてくれる。俺の存在を認めてくれる。
そう思っていた。あいつも同じだと思っていた。そんなもの俺の勝手な思い込みにしか過ぎなかったというのに。
あれは《英雄》ではなく俺達攻略組による《フロアボス》討伐により層が解放され俺達は他の攻略組に遅れないように飛び出して行った数日後だった。
その日はいつものように《圏外》で二人で狩りをしていた。それで少し休もうと安全区に入ろうとした時だった。
俺の足が切られていた。《部位欠損》による身体阻害で身体が動けなくなった。しかし、それよりも俺は何が起きたのか全く理解できなかった。
俺の足を切断したのは友人だった。そこからは俺はめちゃくちゃに攻撃された。一方的に。恐らく、友人は俺のアイテムを奪おうとしていたんだと思う。笑いながら俺を攻撃していた。
あいつは言った。　俺を連れて行ったのもアイテムを奪う為だ、と。いつか来るこの時の為だ、と。
信じられなかった。このデスゲームが始まった時よりも混乱して

いた。頭の中はぐちゃぐちゃだった。色んなものがミキサーみたいに混ざりあった。それも残飯のようなまずい何か。俺は本来、そこで死ぬ筈だった。《英雄》に憧れて、この世界のたった一人の戦友に裏切られてだ。

俺を救ったのは、黒ポンチョの男と紙袋を被った男だった。皮肉にもカーソルはオレンジ。オレンジに殺されかけ、オレンジに救われたのだ。俺を痛みつけている友人が周囲に隙を見せた瞬間、二人が友人を殺していた。否、殺しかけていた。

その時だった。

俺の中で友人に対して怒りが一気に湧いたのは。

俺の中で何かが壊れたのは。

本来の俺、現実世界での《鍵和田　潤》が死んだのは。

俺は二人が倒れている友人を殺す寸前に俺の剣を拾って胸に突いていた。何回も、何回も、何回も刺してやった。清々しかった。二人に何度も褒められた。俺はオレンジ、いやレッドにふさわしいと。俺は笑った。元《βテスター》の友人を殺したんだ。攻略組に近い俺の実力は歓迎された。

いずれはオレンジギルドとして結成するらしい。俺は嬉しかった。ここでなら自分の存在が認められると。俺には価値があると。それからだ、俺が二人に誘われてオレンジプレイヤーとなったのは。

俺は既にオレンジとなっていた友人を殺した為にグリーンのままだった。それを上手く利用して囮役などに俺はなった。

でもその夜、俺は悪夢にうなされた。

俺はこのゲームがクリアされ現実世界に帰っていた。しかし、待っていたのは俺は殺人者として声高く貶す罵倒の声だった。

親戚や高校の同級生から人殺し扱いされた。死んだ両親もそんな目で俺を見てきた。俺が殺した筈の友人も……

朝起きると、そこはまだ仮想世界だった。

人殺しとして追い込まれ生きている現実世界と、人殺しでありながら俺の存在を認めてくれる仮想世界。果たしてどっちが良いのか俺には分からなかった。

既に俺のオレンジとしての役割は決まっていたので、あいつらの指示通りにただ機械通りに動いた。何食わぬ顔で中層のグリーンのパーティに入り誘き寄せた。俺の当時のレベルなら引っ張りだこだったから簡単だった。そして《圏外》へ誘き寄せＭＰＫをした。それが初めての俺のオレンジとしての殺し。５人だった。

それから俺はただ何も考えずに行動した。でも、俺の悪夢は続いた。殺せば殺す程に被害者が夢の中に出て、俺を人殺しと罵った。何で俺なんだ！　俺でなくてもいいだろ！

そんな時、《死神》の噂が聞こえた。そいつはオレンジが殺した被害者の代弁者だという。そんなの俺にとって恐怖の対象でしかなかった。あいつらはアジトをコロコロ変えて絶対にバレない位置にいるので心配するなと言っていたり

でも俺は全身が恐怖でガチガチと震えていた。夢でも、現実世界でも、仮想世界でも追い詰められた。

もう限界だった。思考を放棄して感情を消して、《鍵和田　潤》が死んで、キースという名の機械は壊れていった。

俺に生きる価値がこの世界でも無かった。ゼロだった。でもマイナスにはなりたくなかった。

もはや俺が犯した罪は取り返しがつかなかった。

既にその時は《レベリング》もあまりしておらず攻略組には大きく突き放されていた。俺は戦闘要員じゃなかったからだ。俺はもう何もかもが嫌になってアジトから逃げ出した。仲間が止めたが俺はそいつを攻撃して何とか振り払った。

俺はあいつらの情報網の凄さを知っていたからすぐに見つかると予想していた。だから、俺は昨日からあいつらがあまり来ない最前線に向かったのだ。ここで死ねばこの世界に囚われているプレイヤー達の為になると。ただ逃げた訳じゃない。俺はゲームクリアの為に戦った。俺の存在には価値がある。そう思いたかった。

その結果が《ｍｏｂ》に囲まれる始末。死にかけた。もう、諦めよう。疲れた。どうせ、現実世界の《鍵和田　潤》は死んだんだ。いっそ死ぬなら……

ーーーあぁ、終わりか。
しかし、俺は死ななかった。
無価値な俺はーーーかつて憧れた《英雄》に救われたからだ。

殺人記録Ⅲ

いつの間にか俺が見ている景色は空っぽの何もない部屋になっていった。話しているうちに俺自身が過去にのめり込んでいた。過去といってもここ最近の話だが。

話を聞き終わったシキは本当に何とも思っていなさそうだった。こいつ、俺がオレンジだって事を本当に分かってるのか？　それとも襲われても、返り討ちに出来るという実力の表れなのか？

「なかなか面白い話だったぜ。暇な時間は潰せた」

今の話はこいつにとって本当に自分の好奇心を満たす為だけのものだったらしい。俺の話に少しでも価値があったら俺としても幸いって所だ。

「お前、さっきオレンジは殺しの対象って言ったよな？　俺を……その……殺さないのか？」

「普段なら殺すよ。でもお前は殺さない。お前を殺しても意味がない」

その言葉は再び俺をゾッとさせた。いくら相手がオレンジと言っても躊躇いなく殺すというこのプレイヤーが空恐ろしかったのだ。

でも、あいつらとはどこか違った。

俺はこいつの正体に勘づきつつあった。俺はそれを口にしたくなかった。恐らく、こいつは俺を恐怖させた例の奴なんだろう。その事実は俺を安堵させるのか、不安にさせるのか分からなかった。とにかく俺はここでは死なないらしい。

「で、お前また迷宮区行くの？　そんなに死にたいんなら止めはしないぜ。それとも檻の中へ行くか？」

シキはドアを開けて俺を外へ出て行くよう促す。恐ろしいほどの美形なだけにかなり様になっていた。

でも、俺はその一言で固まってしまった。

俺はこれから……どうすればいいんだ？　また迷宮区に行くのか？　それとも罪を償う為に黒鉄宮の牢獄へ？

分からない。それで俺の罪は清算出来るのか、いや、そんな事はあ

り得ない。
「何だ、行かないのか。俺は迷宮区に行くぞ。話は済んだんだからさっさと出て行けよな」
飾りもしないその言葉は俺の心に深く染み渡った。現実世界の親戚のように陰険な嫌味を言わず、俺が殺した友人のように裏切りもしないのだろう、こいつは。
もし、こいつともっと早く出会っていれば……
シキは言うだけ言うと迷宮区に潜る為に部屋から離れていく。
俺は無性に憧れのその背中を止めたくなった。ここで別れるとこいつとは、もう会わないかもしれない。この出会いを俺にとって、この時だけのものにしたくなかった。
「ま、待て！」
俺は立ち上がるが駆け寄るのを我慢して脚を抑えた。
「俺を助けてくれ！　お前も俺と同じ人殺しで似たもん同志じゃないか！」
「似ているねぇ……まぁ、確かに似ているかな？　お前も俺も空っぽだしな。いいぜ、何を助けてほしいんだ？　出来ることしかしないぞ、俺は」
まさか承諾するとは思わず呆気にとられた。
俺はこいつに何を求めているんだ？　勝手な事をほざきやがって！　自分の馬鹿さ加減に殴りたくなる。
シキは俺の焦りも知らず、身長差的に怪訝そうに見上げている。
「俺は元の仲間から逃げてきて追われている。匿ってくれ！」
そうだ、シキの強さならあいつらに襲われても多分大丈夫だろうし、この部屋も人に知られているとはいいがたい。かなり《圏内》端っこの住処の一部屋だ。
今はあいつらから隠れる事を最優先だ。手持ちの金も多いとは言い難い。数泊なら宿屋で何とかなるが、ずっととなると厳しい。
「隠れ家か……そんなもんこの部屋ぐらいしかないぞ。ここでいいなら好きにしろ」
「……いいのか？」

「そんなんでいいならな。助けるってそんな簡単な事でいいんだな」
こうして俺はこの奇妙なプレイヤーと同居する事になった。
運命なんて、神様なんて信じた事もなかったけど。今この瞬間はそれに当てはまるのかもしれなかった。

朝、俺はギィというドアが開く音で目覚めた。あの悪夢を見なかった。ここまで寝つきが良いのはいつ以来だっけか。かなり久しぶりだ。
昨夜から俺はこの殺風景すぎるこの部屋に住む事になり、その後すぐに迷宮区の攻略（という名の自殺）で身体的にも、精神的にも疲れて寝ようした。
すると、この部屋の持ち主は言った通りに迷宮区に行っていた。俺はすぐに帰るだろうとタカをくくっていた。
俺は目が覚めても、数少ない物の中に毛布に包まり、放ってある枕らしきクッションに惰性で寝転がっていた。どうせすぐ眠くなる。
メニューにある時計を見ると4時だった。起きるには早すぎるが、家に帰るには遅すぎる。
「お前、今迷宮区から帰ってきたのか？」
「起こしてしまったか、悪いな。迷宮区の探索はだいぶ前に終わった。これは野暮用」
野暮用。俺は何となく予想がついたが黙っておく事にした。時間を考えろと怒鳴りたくなったが、揉めるのも嫌だし、お世話になってる身なので何も言えない。
「お前、どうすんの？　俺は今から寝るけど」
「俺もまだ寝とくさ。それと俺は偶然起きただけだ。気にするな」
シキは俺の返事を聞くと手を振り、アイテムストレージから毛布とクッションを取り出し、やがて眠りに入った。
その寝顔は子供みたいで人形のようだった。いや、今見てみると、こいつ俺より年下か。口調とか雰囲気が憂鬱そうで達観してるから年上に思えた。こうして見ると高校生ではないな。中学生くらいか？

俺みたいなオレンジのすぐ側で寝ていて危害を加えられると思わないのだろうか。
知らない天井を見上げながら昨夜の出来事を思い出す。
俺の予想通りなら、こいつは俺の憧れで、オレンジにとって恐怖の対象でしかない例の奴だった。その強さも見た目も噂以上のものだった。
こいつは例の奴だ。勝手にそう決めつける事にした。
でも、なんでそんな事をしているか俺には分からない。こいつは己の正義感に駆られてオレンジを殺しているとは思えない。この寝顔を見せられると余計にそう思う。そして、何より俺を殺さなかった理由も分からない。

いつの間にか寝ていたらしい。時計を見るともう朝だった。しかもシキは出掛けていた。朝帰りと来てもういないとは。これじゃあ、本当に寝るだけの部屋だな、ここは。
暇だったので俺も外に出よう。あいつらに見つかるとまずいが、こんな朝には活動していないだろう。一応、《圏外》には行かないが。どうせ今の俺にしたい事なんてない。暇潰しにはなる。
外へ出るとフラフラと《圏内》を歩き回った。確か、シキは攻略されている最前線の層に部屋を借りているとか言っていた。ここの層が攻略されればすぐ居を移すのだろう。
今更ながら、あんな子供が一人でこんな部屋に暮らしている事がとても不自然に思えてきた。俺は間違っているだろうか？
ブラブラと街を回る。ここの最前線の最も大きな街だけあってかなり賑わっている。レアアイテムっぽい装備をつけたプレイヤーがＮＰＣの店屋や生産職のプレイヤーを冷やかしている。
見た目はプレイヤーもＮＰＣも変わらないというのにその中身はてんで違う。
いや、よく考えるとそんなに変わらないのではないか。
この世界の為に作られたＡＩとこの世界の為に無理やり囚われたプレイヤー達。この世界の支配者は茅場　晶彦だ。それ以外のもの

は全て等しいんだから。あいつ一人の采配でこの世界は全て決まるんだ。
この世界での彼らの中は満たされているんだろうか。
少なくとも俺の中には何もない。
ーーーこの世界で俺を満たしていたのは、俺が殺した友人との絆と、俺の憧れに近づきたいという思いだった。いや、俺はそれに縋っていただけだった。だから友人はあんなにあっさり俺を裏切った。
メッキが剥がれた俺は裏切った友人のせいにして、あいつらの仲間になった。
あいつらにしたくもない殺しをさせられた。それをする事が俺の中身なんだと。本性なんだと叫びたかった。
その時、俺は進む事を止めたんだ。進む事を止めただけなら良かった。停止しただけなんだから。
でも、俺はあいつらからも逃げた。あいつらに無理矢理脅されて殺ったんだと、自分に言い訳をして。
逃げて、逃げて、逃げた。でも、やっぱり、どんなに逃げても俺の中は空っぽだった。そんな俺は誰にも必要とされない。
ーーーただの無価値だ、クソッタレ。

殺人記録Ⅳ

俺とシキが出会ってから一ヶ月《アインクラッド》第二十五層最前線に俺とシキはいた。

俺みたいな奴がいるのには場違いだと分かっているが、俺は今シキとパーティを組んで狩りをしている。戦闘の勘を取り戻すのにはあまり時間はかからなかった。

最初は完全に寄生プレイだったが、シキは自分で勝手に戦えたなら俺の事は気にもしていなかった。そして、シキの無謀と言える戦い方をフォローしていると必然的に俺のレベルと技能も上がっていった。

そもそも何故俺がこんな事をしているのか。

それは俺がシキにあの何もない部屋にあいつらから匿って欲しいと言った事から始まる。

無頓着なシキはそれを簡単に承諾するが何もせず、ずっと他人の部屋にいるのはどうしても耐えられなかった。だから、シキに頼んで《フレンド》登録をして一緒に戦いたいと頼んだんだ。

シキは渋ったが昼間だけなら良いと折れた。ただし自分のやり方でやらせてもらうと言った。

シキの戦い方は本当にめちゃくちゃだ。そもそもどんなスキルを持っているのか。いや、シキの場合はステータスやスキルといい元々の運動神経と反射神経が抜群に優れている。それに加えて敵《ｍｏｂ》を一撃で切断するスキル（またはレアアイテムか）に攻略組トップクラスのステータス。

俺はシキのその辺の事をあまり知らない。ＭＭＯで無理に聞くのはご法度だからだ。

「そろそろ暗くなるから戻らないか？」

「うん……？　もうこんな時間か。俺はもうちょっと残っときたいな。時間も中途半端だし」

確かにキリが良い時間とは言えない。俺はシキに付いて行く事にした。こいつの戦い方は同じパーティとしてはハラハラさせる。もちろん、そんな事今さら過ぎる心配だ。自己満足にしか過ぎない。

俺が寝ている間、もっと無茶な事をしているのは知っている。でも俺は自分より年下のこいつをなるべく一人にさせたくなかった。
そろそろここの迷宮区も踏破しそうだ。俺達（というかシキ）はかなり早い方だろう。飯と睡眠時間以外は全て攻略だ。シキにいたってはその時間も費やしているのだから。
「そう言えばこの層ってクォーターポイントって言うんだっけか。《フロアボス》が他のより強いんだっけ？」
シキは歩きながら憂鬱そうに尋ねた。
「そうらしいな。第十層がそんなに強くなかったから、ここの《フロアボス》もそこまで強くないなんて言われているらしいけどな」
何せ、第十層の《フロアボス》はシキに単独で倒されたからな。

「キース、どうやら噂をしていたら何とやらのようだぜ」
「……」
嬉しそうなシキは目の前の大きな扉をナイフで指していた。俺は《フロアボス》の討伐戦に参加した事がない。その時は死ぬのが怖かったからだ。
でも、その部屋からは他とは違う異様なオーラを発していた。
「まぁ、良いや。今日は遅いし戻るか」
「ん？　良いのか？」
意外だった。一ヶ月もいるとこいつの事も少しは分かってくる。戦闘狂の気があったのだ。でも本人は戦闘狂ではないと言っている。別に他人に何を言われても良いそうだが。
ただそんなシキが、さっきまでクォーターポイントの《フロアボス》の話題をしていいたので、第十層の時のように単独でぶつかると思っていた。
「別に、今は気分じゃない」
相変わらずマイペースの返事に気が抜けてしまった。それから俺達は引き返して拠点へと戻っていった。

「おい、シキ！　《フロアボス》討伐されたぞ！」

俺は街で仕入れた情報をシキに伝えてやった。街はクォーターポイントをクリアした事で盛り上がっていたが、かなり被害が大きかったようだ。中でも《軍》の連中の損害がやばかったらしい。
だが、シキは寝そべってあまり関心がないようだった。
「へぇー、数だけは多いからな、あそこは。人海戦術なんてそんなもんだろ」
確かに《軍》は《アインクラッド》中のギルドの中で最も最大勢力を誇っていた
過去形なのは今回の討伐戦で一気に縮小するかもしれないからだ。
「で、どうする？　拠点を移動させるか？」
「そうだな。ここもさっさと引き払おう」
俺達の何もないその部屋はその日限りでお払い箱となった。

新たな部屋を借りたその日、俺は例の悪夢を久しぶりに見てしまったのだ。その事で一気に寝付けなくなってしまった。軽く水を飲んで気分を一新させようとするが頭から離れない、俺を人殺しと罵る人々や姿が。
別の事を考えよう。部屋を見回すと同居人の姿が見えない。シキはいつも通り夜中にどこかへ行っていた。
気分転換だ。シキを迎えにでも行くか。あいつがどれだけ強くてもあの容姿に俺より年下と来た。今さらなのは百も承知だが、今は何か動きたかった。
そう考えて、ドアノブに手をかけようとした時だった。いきなりドアが開いた。そこには青いライダースーツに赤い上着を着た少年がいた。
「今、帰ったのか」
ーーー蒼い双眼がこちらを射抜いていた。
俺は、その瞬間死んだかと、思った。
何だ、お前は？　シキか？
そう口を開こうとしたが、うまく声が出せない。変な吐息へと変わるだけ。俺の脳裏にはある単語が浮かび上がった。

ーーー《死神》ーーー
薄暗い部屋の中でシキの蒼い瞳が美しく輝く。俺はただ固まっているだけだった。
「キース、俺はお前をーーー」
それからは俺の耳には届かなかった。シキは俺を無視してただ部屋に座り込んだ。
「シキ、お前、何してたんだ？」
今までの暗黙の了解を破った。レベルやスキル、リアルの事などプライベートの事は何も話さなかったというのに。
「お前と同じさ。殺していた。オレンジをな」
俺はその答えに何も返せない。俺みたいな半端者の同情なんていらないだろうし、説教なんて以ての外だ。
「俺の正体。もう、分かってんだろ？」
俺はただ首を縦に振るだけだった。でも、そんな事をする理由が分からなかった。
「俺は空っぽなんだ。俺の中には何もない。生きてる実感が全然ない。生死の境があやふやなんだ。ただあいつらみたいに殺すだけじゃダメだ。もっと死の淵でギリギリの所でやりあえるようなそんな奴じゃないとーーー」
もはや、俺に話しかけるというよりは独り言になっていた。その語尾は今までのシキからは考えられない程、弱々しい。年相応の少年のようだった。
くそっ、こいつが何でも出来るなんて俺の勝手な思い込みで！
「どうしたんだシキ！　くそ！」
「お前ではダメだ。これじゃあ、あの時と変わらない。あいつがいないだけで俺はーーー」
そう言うと腕を枕にしてゴロリと寝転がった。
シキの悩みなんて俺にはまったく分からない。付き合ってまだ時間も全然経っていない。こいつは俺と同じなんかじゃない。でも、俺にだって出来る事はある。
「俺にはお前の気持ちが分からない。けどな。何か悩みがあるんなら

聞くぞ。どうせお前フレンドなんて俺以外いないだろう。現実世界でもいなさそうだな」
こんな偏屈な奴に付き合えるのは俺みたいな半端者かよっぽどの物好きだ。
しかし、俺の言葉にシキは振り返って、バカにすんな！と叫んでいた。こいつが、ここまで感情的になるのは珍しい。まさか、いるのか？
「現実じゃあ俺にだっている。この世界にはいないけどな。一人じゃないぜ。二人だ。そいつらは兄弟だけど」
俺はその事実にまた驚いた。まさか二人もこいつの友人をしているなんてやはりよっぽどの物好きなのか。性別は……男だろうな。
見た目だけは良いが、こいつのマイペースについて来れる女が二人もいるとは思えない。賭けてもいい。
「いるならいい。でも、この世界にいないだろ？」
シキは無言だった。つまり肯定って事だ。
「なら俺が代わりに吐き出し場所になってやる。愚痴でも何でも聞いてやるさ」
そうだ。俺にはいた。裏切られて俺が殺した友人が。どれだけ後悔してもその事実は変わらない。
あいつに夢で罵倒されても、不思議と友人との出会いは悪くなかったといえる。あいつがいたからこの世界に来れた。あいつがいたからシキに会えた。
色んな事をした。馬鹿やったり、喧嘩したり、担任の悪口を言い合ったり。別れは最悪だったが、出会いは最高だったんだ。
俺の言葉にシキは目を開いていた。今日はこいつの珍しいものが二度も見れた。シキはただ、バカな奴、と呟いてから安らかな顔で眠りに入った。

罪咎叙述

その日、俺は最前線の迷宮区に一人で潜っていた。
前にシキとフレンド登録をしてコンビを組んだのは良かったものの、結局俺達はソロで《レベリング》をしている。
別に喧嘩した訳ではない。一言で言うなら男の見栄というやつだ。
いくらシキが《英雄》と呼ばれる一流プレイヤーでも年下の子供に寄生プレイをし続けるのは俺が耐えられなかった。それと同時に俺の住居もシキと同じではなくなっている。それでも隣の部屋を借りているのだが。
ずっとシキに頼ってばかりなど俺はごめんだった。もちろん、いつも一人ではなく気が向いたらシキと二人で出向く時もある。それでも睡眠時間を殺してまでするシキには到底及ばない。
今日も俺は夜までここで《レベリング》をしているつもりだった。
俺があらかたの《ｍｏｂ》を倒して一息ついていると入り口側からフラフラと誰かがやって来た。最前線には俺の命を狙うあいつらは来ないので心配はしていないが、それでも万が一がある。
俺はすぐに警戒して腰に差してある長剣に手をやる。
来たのは全身黒ずくめのコートを着て《片手剣》を背負ったプレイヤーだった。顔は童顔寄りで背は俺よりも低い。俺よりも一、二歳年下と言ったところだ。でも、そいつは俺の事など眼中などないと言わんばかりに目の前を通って行った。
一言ぐらい声を掛けても良さそうなものだが？

不思議に思ったが、よく見ると目の焦点が合っていない。
俺は相手の顔つきを見て何を考えているのか分かった。いや分かってしまった。
ーーーこいつは死にたがっているんだ。

「おい！　待て！」
呼び止めるも返事をするどころかやはり無視だ。俺は去ろうとす

るのを肩を掴んでいた。
「おい、待てったら！」
「あ、あぁ……何だ、アンタは」
ハッとした風に振り返り、ようやく俺の存在を認知したらしい。
「何だ、あんたは、とかじゃねぇよ。お前、大丈夫か？」
さっきまで俺の事に気付いてさえいなかったのにな。
「何がだ。アンタに心配される覚えなんてないが」
「そんな今にも死にそうな顔をして良く言えたもんだな。お前、どれくらい潜ってる？　いや、何日寝てない？」
そう聞くと顔を顰めてだんまりを決め込んだ。
「何も言わないって事は図星か。やっぱり全然寝てないんだな」
あの無茶ばかりするシキでさえ毎日ちゃんと寝ている。そうでないといずれボロが出るからな。そんな俺の反応が気に食わなかったのが今にも殺さんばかりに睨んでいる。
「アンーーー」
「アンタには関係ない、とか言うなよ。目の前で無茶し過ぎている奴がいるのを見て黙ってられるか」
「うるさい。アンタに何がわかる？　俺は戦わなくちゃいけないんだ」
あたかもそれこそが自分の義務かのように語るこいつの顔は泣きそうだった。それを必死に我慢してこいつは強くあろうとしていた。
それでも、こんな顔をしてまでは睡眠時間を削ってまでやるべきじゃない。精神的疲労が溜まり倒れてしまってしまう。そうしたら迷宮区内で《ｍｏｂ》どもに殺される未来が待っているだけだ。命あってのモノダネ。それがこの世界の原則だ。
「何があったのか知らない。そんな戦い方してると死ぬぞ。ここにソロでいるって事は攻略組なんだろ。なら少しでも自分の命を……」
「うるさい！　アンタに何が分かる！　俺はもう、こうするしかないんだよ！　俺はみんなを……サチやケイタを……」
そう泣き叫んばかりの勢いで怒鳴ると、溜まっていた疲労が一気に噴き出したのかそいつはそのまま倒れてしまった。

「はぁ、何でこうなるかねぇ……」

気付いた時、俺はベッドに寝ていた。何故、こんな所にいるのか。記憶があやふやで覚えていない。

確か、最前線の迷宮区にいたはずだ……そこで誰かに会った事を思い出した。

「ようやくお目覚めか。気分はどうだ、黒いの」

そうだ、この男だ。俺が迷宮区を探索して声をかけてきたのは。余計な事をしてくれた。だが助けてくれたのは事実だ。疲労が溜まり倒れた俺をここまで連れて来てくれた。

「助けてくれた事は感謝している」

「そうは見えない。余計な事をしてくれたって顔に書いてあるぞ」

俺は指摘され黙るしかなかった。紛れもない事実だったからだ。

でも、俺はそうするしかないんだ。俺の思い上がりが壊滅させた、いや、殺した。《月夜の黒猫団》はもう帰ってこない。

こんな事ぐらいしかサチに……みんなに……出来る事がなかった。生きてる事が辛い。それでも死ぬ事は出来なかった。自分の弱さに吐き気がする。

自分でも無茶だと分かっている《レベリング》をして意味もなく、誰にも知られず死んでいく、それこそが俺の……

「何があったかは俺には分からない。でもな。あんな場所で死ぬのを見てるのは寝覚めが悪過ぎるぞ。それにその辛気臭い顔をやめろ。まるで自分が世界で一番不幸じゃないといけないって言ってるようでな」

「それは悪かったな」

「はぁ、もういい。とにかくあんな事はもうするな。手前の管理ぐらいは手前でしろ」

俺はただ、あぁと適当な返事をした。さっさとここを出て行って迷宮区に戻ろう。どうせもう、会う事はない。

しかし、目の前の男は無表情の俺の顔を見つめていた。男に見られて喜ぶ趣味はない。不快なだけだ。

「何だ？　何か俺の顔についているか？」
しかし、男は、違うと否定した。じゃあ、なんなんだ？　俺が怪訝に思っていると男はいきなり驚く事を言ってきた。
「お前、俺と組め」
はっ？　何を言っているんだ、こいつ？
「何を言っているんだ？　知り合ったばかりのアンタと組めって言うのか？」
そんな事出来る訳がない。俺は自分のレベルを隠し、こそこそと他人のギルドに入り込み、その挙句に俺は彼らを殺したんだ。そんな俺が今さら、人と組むだと？　あり得ない。
「じゃあ、俺じゃなくても良い。誰か他に組めそうな奴いないのか？
今のお前を一人にさせといたらいずれ潰れるのは目に見えてるからな」
そもそも俺にはフレンドは少ない。クラインやエギルぐらいだ。そんな彼らも自分達の都合がある。俺が見捨ててしまったクラインは自分のギルメンがあるし、エギルは商人として自分の店が忙しい。
とてもじゃないが彼らとコンビを組むなんてそんな厚かましい事を今さら、どの面下げて言えばいい？
「その様子だといなさそうだな」
俺の沈黙を肯定と捉えたらしい。事実だが。仕方がない。レベルを言い訳にするか。強く突き返せば勝手に離れていくだろう。
「アンタの実力じゃ……」
「安心しろ。俺も足を引っ張らない程度はあるさ。曲がりなりにも同じ最前線の迷宮区にいるんだからな」
確かに、と思う。あの時間までソロで戦えるのはかなりの実力がある証拠だ。少なくとも足を引っ張る事はない、か。
待て。という事はこいつ攻略組か？　いや、攻略会議にこんな奴は見た事がない。だったらこいつは一体……
「反論はないな。だったら俺と組んでもらおうか」
この男の正体を考えているうちにパーティ申請がきた。こんな強引にされるなんてこっちの身にもなれよ、こいつ。

俺がどうしようが勝手だろうが。俺はこれからもソロで戦う。
あぁ、この男はいい奴なんだろう。倒れた俺を助けてその上、部屋まで貸してソロの俺に組めというのだから。とんだお人好しだ。
でも、そんなお人好しのこいつもサチ達のようにいつか俺が殺してしまう。そうなる前に。
俺はパーティ申請の表示に《Ｎｏ》を押そうとした。
これでいい。これでーーー
「どうした？　承諾するにしろ、断るにしろ、早くしろ」
なんで手が動かない？　ここで断ってこいつと縁を切ってそれで終わりじゃないか。もう、会う事なんてないんだから。
いや、本当は分かっていた。
ソロで戦う事が俺の犯した罪を償うなんて自分に言い続けながら、俺は嫌だったんだ、一人でいる事が。誰かと一緒にいたかった。情けない。馬鹿だ、俺。
「……一つ聞いていいか？」
俺は返事を保留にしながらある疑問が湧いた。
「答えられる事なら」
「どうしてここまで俺にしてくれる？　普通なら助けるまではしてもソロで戦え実力があるなら、何も知らない俺にパーティ申請なんてしない」
「似てるんだよ」
「似てる？　誰に？」
俺のような奴がこのお人好しの周りにいるとは思えない。
「昔の腐った、いや、さらに腐っていた昔の俺にな」
俺がこの男に？　こんな良い奴はそんないない。ましてや俺のような薄汚い奴に似ているなんて。俺が口を開こうとするのを手で制して自分の過去を語った。
昔、自分は友人を殺してしまった事。
その事が原因でオレンジになった事。
その罪に耐えきれず逃げ出し、俺のように自暴自棄になった事。
そして、そんな自分を助けて、今でも一緒にいてくれた友人が出来

た事。
「直接殺したのは相手が俺を傷つけたオレンジのみだったから色は変わってないけどな。それでも人殺しには違いない」
俺は想像がつかなかった。こんなお人好しのこいつにそんな暗い過去があるなんて事を。
「俺だってあの時、そのダチが来てくれなかったらどこぞの迷宮区で野垂れ死んでいた。俺はお前を見て重ねたのかもしんねぇ。それが理由だ」
俺はこいつのように直接手を下した訳じゃない。でも、やった事は同じだ。
俺は気付けば勝手に口が動いていた。
俺がサチ達にレベルを隠していた事。
その思い上がりが原因で、彼らを死なせてしまった事。
それに何の反応も示さなかった。てっきり罵倒が返ってくると思ったのだ。それを言うとヘッと苦笑して、
「俺は当事者じゃないし、そのサチって子の事も知らないからな。何も言えないよ。でも、これだけは言える。俺は死なない。俺は彼らより強い！　お前を一人にして死んでたまるかよ！」
俺はその時、フッと肩の力が抜けた気がした。自分は生きて良いのだと。一人じゃなくて良いんだと。そう言われた気がした。
「お前が心配してる事なんて万が一もない。安心しろ。だったら俺がお前を守ってやるよ」
その軽口に笑ってしまった。そんな事言われてどう返せばいいんだよ。本当に馬鹿で超がつくほどのお人好しだよ、こいつは。でも、俺は嬉しかった。心の中で空いていた物が埋められたような。そんな気がした。
「へっ、言っとけ。これでも攻略組じゃ上から数えた方が早いんだぜ、俺は」
そ軽口を返して俺はパーティ申請を承諾した。
「おう！　あぁそうだ。一つ言い忘れていた」
「何だ？」

すると、ニッと笑って手を差し出してきた。
「自己紹介していなかったな。俺はキースだ。よろしく」
そう言えばまだしていなかった。出会ってこんなに時間が経っていたというのに。そのじじつに笑ってしまった。
「俺はキリトだ。これからよろしく頼むな」

代償簒奪Ⅰ

２０２４年　１１月、浮遊城《アインクラッド》に二年目のの冬が訪れた。つまりそれはこのゲームが始まって一年が経過をした事を意味する。

そんな中、攻略組を含めたプレイヤー間である噂が広まった。それは複数のＮＰＣが口にし始めたのだ。

年に一度のクリスマスの夜に《蘇生アイテム》をおとす《フラグｍｏｂ》が現れるという。名前は《背教者ニコラス》。

そして、俺とキースも他のプレイヤーと同じくコンビを組んでこれを狙っていた。いや、それは正確じゃない。狙っているのは俺一人だ。俺が死なせないと誓ったサチを復活させる為に。

これは俺の身勝手な我が儘だ。俺一人で行くつもりだった。でも、その要求をキースはそれを笑って跳ね除けた。

一人で行くのは危険すぎると。ダチなんだから頼れよといったのだ。

それだけじゃなく少しでもリスクを減らす為にキースは前に言っていた友人を誘っていた。そして、そのキースを救ったという友人の正体を知った時は本当に驚いた。

「前言ってた俺のダチってのを紹介するよ」

二人でＮＰＣが経営するレストランで晩飯を食べているとそんな事を言い出したのだ。前もってそれは聞いていたから驚きはしなかったが、人見知りの俺は少し、いや結構緊張していた。

キースはメッセージで呼び出すと入り口から友人らしき人物が入ってくるのが見えた。

流石の俺も自分の目を疑った。何しろ、いたのは、

「ほら、こいつが前に行ってた俺のダチ、シキだ」

「どうも。キースのダチ？だ」

かつて《孤高の英雄》、《狂戦士》などと呼ばれ畏怖されたプレイヤーだったのだから。

あまりの衝撃に晩飯の味すら忘れて、二人の関係を聞いた。前は同

居人だったが今は隣同士の部屋を借りて住んでいるのだとか。キースの戦闘技術はシキに教わった部分もある、今は別々にソロで活動している等々。謎に包まれていた《英雄》の正体を知れたのだ。
鼠でさえ知っている事はかなり少なく、俺はそんな貴重な情報をを手に入れる事が出来たといえよう。
話してみると、確かに色々気怠げで達観した少年といった印象は変わらなかったが、本当に時々、好物の甘い和菓子を食べる時の仕草やキースにからかわれている時の反応は年相応の少年だった。
俺もフレンド登録をしたが驚く事にシキは俺で二人目だという。もちろん、一人目はキースだ。ソロの俺もそこまで少なくはない。
キースはそんな風変わりな友人もイベントクエストに誘っていたが、やる事があるといってさっさと行ってしまった。
二人だけのコンビでは、年に一度のイベントボスを倒すのは厳しい。もし、何かあった時のカバーがきつくリスクがでかすぎるのだ。
今はそれを減らす為の《レベリング》の期間だ。レベルが上がれば上がる程に安全度も比例して上がる。クエストまで後、五日ある。その間に何としてでも《背教者ニコラス》を倒せる程度まで上げなければ。
俺達がいるのは第四十八層、通称アリ塚と言われる経験値スポット。しかし、そこに《Ｐｏｐ》される巨大なアリ型の《ｍｏｂ》は雑魚ではない。その上、一度に湧き出る数が多い。それ故に効率が良いと言われるでもある。本来はパーティで挑み互いをカバーし合いながら稼ぐのがセオリー。それでも二人でなら俺一人よりは断然に危険度は下がる。
キースは本当にサチを救えるか分からないのに、俺の勝手の為にここまでしてくれている。俺が折れる訳にはいかない。昼から夜までずっと潜って付き合ってくれている。でも、もう日が暮れてから随分と経つ。いくらソロで慣れているとはいえ、俺とキースにも疲れが来ていた。
「はぁはぁ、そろそろやばいかも」
キースが座り込んでいった。いつもの余裕のある表情をしていな

い。俺もそろそろ戻ろうと提案しようしていたので、ちょうど良かった。
俺はポーションを二人分取り出しそのうちの一つを寄越した。
その時、背後から誰か来た。すぐに警戒し、武器に手をやるが生憎それは無用な心配だった。そいつは俺の昔からの知り合いだったからだ。
「相変わらず無茶なレベル上げしてんじゃねぇよ、キリトよ……ん？おめぇ、誰かと組んでんのか？」
暗闇から現れたのはクラインだった。
趣味の悪い赤いバンダナをつけ、あまり見栄えが良いとはいえない無精髭を生やした侍風の装備をしたプレイヤーだ。
どうやらソロを貫いていた俺が誰かと組んでいるとは思わなかったらしく、かなり驚いているようだった。
「誰だ、知り合いか？」
「あ、あぁ、紹介するよ。一層からの腐れ縁のクラインだ。ギルド《風林火山》のリーダーをしている。クライン、こっちは今、俺と組んでるソロのキースだ」
「キースだ。今はキリトと組ませてもらってる。あんたの名前は何度か聞いた事あるぜ。一気に攻略組の仲間入りした《風林火山》の噂もな」
キースはイケメンという訳ではないが、端正な顔つきなのでソロの俺とは雰囲気からして違う。
「おう、こっちこそ。他の攻略ギルドに比べりゃ大した事ないぜ。一ギルドの頭張ってるってだけだしな。それにしてもよぉ、ソロのお前がどういう……」
紹介が終わるとクラインはそう言って俺の肩を掴んできた。やっぱりこいつは良い奴だ。前に自分を見捨てた相手の事を心配してくれる程には。
「まぁ、色々あってな。攻略組と同程度には強い奴だし頼りになる。良い奴だし」
「そうか。おめぇがそう言うなら文句ねぇ。でもよ、いくらコンビだ

からこんな時間までレベル上げやってんのか？」
「いや、そろそろ戻るさ。ここで死んでちゃ元も子もない」
「おめぇ、やっぱりあれ狙ってんのか」
俺は何も言えなかった。クラインはサチ達の件について知っている。恐らくここに来たのもそれを鼠から聞いて、か。
「それが無駄って事もあるんだぞ？　思い出すのも癪だが茅場の野郎が言っていた事は事実だ。それを承知でか？」
泣きそうな、それでいて俺の事を本当に考えてくれているのが分かった。俺は一言、あぁとだけ答えた。こんな良い奴が心配してくれるというのに自分の愛想の無さに怒鳴り散らしたくなる。
クラインは俺の意思が固いのを分かると、苦虫を噛み潰したような顔をしただけで俺を止めようとはしなかった。面倒見の良いこいつの事だ。てっきり俺をパーティにいれるなりすると思ったを
その代わりにキースの方を向き直り、いきなり頭を下げたのだ。
「キースさん、こいつは口下手で無愛想で戦闘マニアの馬鹿たれですが、例のクリスマスのイベントクエスト、よろしく頼んます」
やっぱり知ってたのか。俺が《蘇生アイテム》を狙ってる事を。俺が鼠から情報を買った事をさらに買ったんだな。
いきなりの事で俺もキースも面食らったがやがてキースはニィと笑った。
「おう、任されたぜ！」

代償簒奪Ⅱ

俺達二人はイベントボスが現れるという巨大なモミの木に立っていた。それは聖夜に相応しい神秘的な存在感を放っていた。

「時間だ」

キースの言葉と同時に視界の端に写るデジタルの時計が零時へと変わった。

「来るぞ」

そして、どこからともなくリンリンと鈴の音が聞こえた。すると上空に白い光の線が見えてきた。

それは巨大なソリを引いた赤い衣装を着た約三メートルはある巨大なモンスターだ。こいつが《背教者ニコラス》だ。

灰色の長い髭を生やしたサンタクロースのコスプレをしながらも、いかにも《ｍｏｂ》らしい醜悪なデザインをしている。紅い眼をギョロギョロさせながら俺の身長ほどはある《片手斧》を持っている。

関係ない。こいつがどれだけ強かろうと《蘇生アイテム》を持っているなら……

サチ……ケイタ……テツオ……ササマル……ダッカー……待ってろよ。　こいつを殺して必ずお前達を……

「うるせぇよ」

「黙れ」

キースも同じ事を考えていた。既に《盾》と《片手剣》を構えている。俺も背中から《片手剣》を引き抜く。クエストの開始なんて待ってられるか！　ただこいつを殺してアイテムを奪う！

『うおおおおお!!』

やはり年の一度のイベントボスなだけの事はあった。俺はキリトとスイッチを繰り返しながらギリギリを見極めて《背教者ニコラス》と戦った。

だが勝ったのは俺達だ。生き残ったのは俺達だ。被ダメージこそかなりあったが幸いレッドの域には達せず勝利する事が出来た。

そしてトドメを刺したのはキリトだ。つまり《ドロップアイテム》は俺ではなくキリトの手に渡った事になる。俺だとしても渡していたので意味はない。それは分かっているのに何だかその事実が嬉しかった。

その手には青い宝石があった。

「それが例のアイテムか」

「らしいな」

早く見たいと思ってるかもしれない。何しろ、こいつはずっと求め続けていたのだから。でも、これだけはもう一度言っておこう。こいつの為にも。

「キリト、何回も言うが期待しすぎるなよ。お前の考えているような代物じゃない可能性もあるんだからな」

「あぁ、分かってるさ」

そして、キリトは苛立たしく返事をしてそのアイテムにタッチした。メニューからヘルプを見てアイテム詳細を読んだ。

あの情報が本当ならこれは間違いなく《蘇生アイテム》だ。これがあればキリトが俺と出会う前に一緒に居たというギルドの仲間達。彼らを復活させる事ができる筈だ。

「グッ……！」

一通り目を通したキリトの表情が一瞬に変化したのだ。期待していたものに裏切られたかのような。ただ絶望に染まっていた。そして雪が積もった力無く、地面に座り込んでいた。

嫌な予感がした。まさか……

俺もすぐにこの《還魂の聖晶石》という名前のアイテムに触れて確認した。

そこに載っていた説明は確かに情報通り《蘇生アイテム》だった。でも、

「対象のプレイヤー死んでから十秒以内だと？　クソが、クソがっ！　だったら最初っからそう言えよ！　茅場ぁ！」

俺はアイテムを叩きつけて踏みつけてやりたくなった。そうしないとこのやり場のない怒りが抑えられそうになかった。俺が殺した

友人に裏切られた時以上のものだった。
キリトは地面に座り込んだまま暗い空を眺めている。いや、何も見ていなかった。ただその瞳に写っているのは暗い絶望だけだった。
俺はこのクエストに行く前のシキの言葉を思い出していた。

確か、あれは俺がこのふざけたクソクエストにシキを誘った時だった。
「本当にあるのか？　その《蘇生アイテム》とやらは」
「情報源はＮＰＣらしいぜ。今まででそういったフラグ情報で嘘ついたＮＰＣはいなかったしな。信頼性は充分にある」
そう言うとシキは、ふぅんと返事をして興味を失くしたように俺から視線を外した。
「そっか。でも、もしそんなのが本当にあるんならそれは」
ーーー『死』に対する冒涜じゃないかーーー
確かシキはそう言ったんだ。

それから俺達はクライン達の元へ引き返した。クラインはアイテムを見て、ただ俺達に涙を流して生きてくれと言った。キリトは何も返さなかった。俺はただ頷くだけだった。俺も気づけば泣いていた。
《蘇生アイテム》はクラインに渡した。ギルドを率るあいつの方が使う機会は確実に多いからだ。
「キリト、ごめん」
帰り道、俺は勝手に口が動いていた。特に理由はなかったのに。
「どうしてお前が謝るんだよ。どうして……！」
それから俺達は口を開く事もなく帰途に着いた。

俺達が拠点にしている街へ行くと、そこにはシキがいた。ずっと俺達が来るのを待っていてくれたのか。俺達の様子を見ると何か察したらしい。ただ黙って見つめるだけだった。
「笑えよ。アンタの言う通りだったよ、シキ。《蘇生アイテム》なんて

存在しなかった」
キリトは焦点が合っていない。その目には全く覇気がなかった。
それでもシキはいつも通りの憂鬱そうに、そうかと素っ気ない返事をして俺達を眺めていた。
「上手い飯屋があるんだ」
唐突だった。シキが関係ないの話を振るのは割とあるが、流石にこの空気でそれはないだろう。どこぞの名家の生まれらしく料理にうるさい。そのシキが上手いという飯屋は相当なんだろう。
キリトは呆気に取られていた。俺達の成果を馬鹿にされると思ったのだろう。勝手に突っ走っして勝手に落ち込む俺達を。
「隠れの名店らしくてな。多分俺以外知らないと思う。サブクエを攻略しないと入れないんだぜ。あぁ、攻略した奴の紹介があれば食えるけどな。キースも来いよ」
キリトの手を引いてひたすら歩く。嫌がるかと思ったが生憎、勢いに着いてこれていなかった。一番付き合いの長い俺でもこれには苦笑するしかない。
案内された店は入り組んだ路地裏に建っておりその癖、中もかなりこじんまりとしていた。客はクリスマスだってのに俺達以外に誰もいない。
俺達を適当に空いた席に座らせ勝手にＮＰＣに注文していた。俺とキリトの反応も見ずにだ。
運ばれた料理は確かに美味そうだった。でも俺もキリトも手をつけなかった。そんな気分になれなかった。こいつが俺達を励まそうとしてくれているのは分かる。でも今回ばかりはそれに乗れなかった。
「気持ちは分からなくもないけど。今は食えよ。俺の奢りだぜ。こんな事滅多にないんだからな」
確かに滅多にない事だ。こいつは自分だけで始まり、自分だけで完結している奴だから。
「どうして？　どうしてだよぉ……？」
手を膝の上に置いたままキリトは泣いていた。顔を俯かせ涙がポ

ロポロと垂れていた。
「さぁな。何となく俺がそうしたかっただけだ。俺より年上の癖に泣くなよ」
「るせぇ！」
そして、キリトは泣きながら、出された飯に次々とガツついていた。俺もその様子を見て我慢の限界に達した。それはもう酷かったと思う。良い年した男二人が泣きながら年下に奢ってもらった飯を口一杯に頬張ってるのだから。
「ご馳走様。ありがとう、シキ」
シキは構わないと言うように手をヒラヒラさせた。
その時、誰かのメッセージの着信音が聞こえた。それはキリトだった。
「サチからだ……」
サチ。確かキリトが例の件で失ってしまった仲間の一人だったか。でも死んだ筈じゃなかったか。
キリトが操作すると取り出されたのはメッセージを保存出来る《記録結晶》だった。そういう事か。お前への最後の伝言って訳か。
俺はシキに目配せをして、店から静かに立ち去った。
後ろから聞こえてきたのはキリトが漏らした嗚咽の声だった。
こうして、俺のこの世界での二度目のクリスマスは終わった。

悪鬼蝟集Ⅰ

２０２４年の２月も終わりに差し掛かる頃、浮遊城《アインクラッド》は第五十四層まで攻略されていた。

そんな中、俺とキースの二人もその拠点へ居たのだが。

「なんか、人集りが出来ているぞ」

キースが言った方を見ると転移門の周りに多くのプレイヤー集まっている。デュエルでもしているのかと思ったが、違うらしい。

「頼む。誰か、あいつらの敵を取ってくれ！　ここにいる人達なら出来るはずなんだ……」

男のプレイヤーが涙ながら付近のプレイヤーに《結晶アイテム》を持って縋り付いていた。しかし、他のプレイヤーは気の毒そうにしながらそれを無慈悲に振り払っていた。

その男は《シルバーフラグス》という中層ギルドのリーダーだった。しかし、十日ほど前に自分を入れて欲しいという女のプレイヤーに誘われオレンジどもにＰＫされてしまったらしい。

そして、この最前線の拠点に来て自分のレベルでは出来ない敵討ちをして欲しいとの事だった。それも自分の全財産を叩いて買った、べらぼうに高い《回廊結晶》で牢獄へ突き出して欲しいと。

それを聞いて俺はもう黙っていられなかった。善良なプレイヤーが腐ったオレンジどもの食い物にされるなんて暴挙が許されていいはずがない。

俺が男の依頼を受けようと前に出ようとした時だった。

「そいつの名前を教えろ」

その声はキースだった。右手を握りながらも震えており、表情は苦渋に満ちていた。そうだ。ここには俺よりもそんな事を許容出来ない奴がいる。ここは任せよう。いつも以上に頼もしく見えた。

「あんた……やってくれるのか？」

「あぁ。俺が引き受けた。その依頼引き受けた。あ、てな訳でキリト。勝手に引き受けて悪いがしばらくソロでやってくれないか？」

途端に決まりが悪そうに言うが俺は全く気にしていなかった。確

かにこういう場合パーティの一員である俺の意見を聞くのが常識だが俺は怒ってなどいなかった。
「何言ってんだ。お前が先に言わなきゃ俺が立候補してたよ。俺も手伝うさ」
「キリト……」
この際だ。俺も引き受けるつもりだったしちょうどいい。二人の方が安全だしな。　俺は気にするなと手を振ってやった。それを確認してキースもいつもの明るい表情に戻った。
「あんたら、本当にありがとう……ありがとう……！」
それから俺達はリーダーの男から奴らの情報を説明されてからその依頼を達成する為にその場を後にした。
今回の敵は《ｍｏｂ》ではない。標的はオレンジギルド《タイタンズハント》。待ってろよ。報いは必ず受けてもらう。

「さてと、どうするかね。奴らを探すあてはあるかね、キリト君よ？」
「奴らがいた三十五層のホームをシラミつぶしに探すってぐらいだな」
「おい、それって……」
言うな、自分でも考えなしなのは分かっているから。それぐらいしか方法がないのも事実だ。リーダーの名前が分かってもどこにいるかなんて知りようがないのだから。
「今日の所は一旦、休もう。本格的に探すのは明日からだ」
「何でだよ。一秒でも早く探した方がいいに決まってるだろ！」
キースは豹変したように大声を上げた。俺もいきなりでびっくりしたぞ。
「焦る気持ちも分かるが、今はどうやって探すかを考えよう。安心しろ。奴らはこの世界から逃げられないさ。アルゴにも頼んでおくしな」
「あぁ……そうだな」
俺の前にいるキースは仕方ないと言わんばかりに同意した。しかしその表情は俺からでは見えず、その心情を察する事は出来なかっ

た。

２０２４年２月２３日

第３５層《迷いの森》では一人のプレイヤーが今、窮地に立っていた。正確には一人と一匹だが。肩で息をしながら数体の巨体を誇る猿型の《ｍｏｂ》に囲まれていた。

そのプレイヤーの名前は《Ｓｉｌｉｃａ》。《アインクラッド》ではかなり珍しいとも言える《ビーストテイマー》だった。それも遭遇するのが珍しい《フェザーリドラ》を連れている。

その容姿の愛くるしさも相まって中層プレイヤーからピナと名付けた《フェザーリドラ》のビーストテイマー《竜使いシリカ》の二つ名でアイドルのように親しまれていた。

しかし、そんな彼女もこの状況をピナとだけで突破するのは難しい。中層域とはいえ安全マージンとは言えない彼女のレベルでは厳しい。

そもそもどうしてソロプレイヤーでもない彼女が一人でいるのか。

本来、彼女はパーティを組んでいたのだがそのメンバーの一人であるロザリアという女性プレイヤーと回復アイテムの分配で勝手な言い分をされてパーティを離脱したのだ。

それでそのまま一人で勇敢に《迷いの森》を抜けようとしたのはいいのだが地図も持っていない彼女ではプレイヤーを迷わせる為に複雑な造りとなっているこのダンジョンの出入口にまっすぐ辿り着くというのは困難だったのだ。

そして案の定、フラフラと彷徨うことになり、こうして《ｍｏｂ》に囲まれてしまうという事態に陥ってしまった。

ＨＰがイエローゾーンに到達したが相棒のピナが《フェザーリドラ》の固有能力で回復をしてくれた。

とはいえ、それでも事態は好転しない。すぐに回復アイテムを取り出そうとポーチを漁った。

（回復アイテムがもう……！）

その動揺は致命的だった。棍棒を持った《ｍｏｂ》の一体がピナを

吹き飛ばしたのだ。
この世界では痛覚こそないがその余波で持っていた《短剣》を遠くに落としてしまった。死を覚悟したシリカは本能で目を瞑っていた。しかしーーー
ＡＩの一種で決められたアルゴリズムでしか動かないピナがシリカを庇い《ｍｏｂ》からの一撃を受けたのだ。
「ピナ！」
シリカは懸命に呼びかけるもその努力は虚しく、一瞬ＨＰが減りやがてレッドの域に達し、青いポリゴン片へとなり消えてしまった。後に残ったのはピナから落ちた青い羽根だけだった。
一人になってしまった悲しみで呆然とするシリカ。背後からは《ｍｏｂ》が近づいてくる。
「ピナ……」
覚悟を決めたその時だった。
いきなり《ｍｏｂ》がポリゴン片に姿を変えてやられてしまったのだ。
そしてそこにいたのは、全身真っ黒の《片手剣》使いと、胸当てをした《盾》を装備した《片手剣》使いだった。シリカよりは年上だがそれでも数歳しか変わらないだろう。
死にかけの自分を助けてくれたのか。生きている事への安堵と一人になってしまった悲しみで涙が溢れてきた。羽根を拾ってピナの名前を呼ぶ事した彼女にはそれしか出来なかった。
「それは……？」
「ピナです。私の大事な……」
すると驚くような反応をされた。《ビーストテイマー》は珍しいからだ。
「キリト。どういう事だ？」
キリトと呼ばれた黒い《片手剣》使いは知っていたみたいだが《盾》装備の方はよく分かっていないらしい。
「《ビーストテイマー》が使役する《ｍｏｂ》は死んだ時に《心アイテム》を残すらしいんだ。恐らく、その羽根は……」

「……そうか。それは悪かった。すまん、嬢ちゃん」
気まずそうに言うがシリカは首を横に振る。彼らは悪くない。むしろ助けてくれたのだから。
「いえ、全部私が悪いんです。馬鹿だったんです。一人で森を突破出来るなんて思い上がって……それでピナを……助けてくれてありがとうございます」
《盾》装備の男は悔しげに目を閉じた。自分達がもう少し早く駆けつけていれば助ける事が出来たからだ。しかし、たられば の話は意味はない。重要なのはこれからどうするかだ。
「悔しがるのはまだ早い、キース。君も泣かないで。何とか君の友達を蘇生出来るかもしれない」
黒い《片手剣》使いのキリトが説明するには第四十七層にあるフィールドダンジョンの《思い出の丘》という場所に使い魔用の蘇生アイテムの花が咲くとの事だった。
「本当ですかっ！」
絶望の底から希望を見つけ顔を輝かすピリカ。悲愴感しかなかった表情から正気がある。
しかし、すぐに気付いた。それはレベルの問題。第四十七にあるのでは彼女のレベルで行くのは自殺行為だ。
「実費を貰うんなら俺が行ってきても良い。でも残念ながら使い魔の主人が行かないと肝心の花が咲かないんだ」
無慈悲な宣告。シリカにとって今の時点では実質不可能と言われているものだ。
「いえ……情報だけでもありがたいです。本当にとても。頑張ってレベルを上げればいつかは……」
「それは駄目だ。遅すぎる」
「何でだよ、ってまさか……」
キースと呼ばれた《盾》持ち《片手剣》使いは察したらしい。しかしシリカはもうそれしかないのだ。

「いつかじゃ駄目なんだ。蘇生が可能なのは死亡から3日以内。それ以降は《心》が浄化し、変化して《形見》に変わる。そうなれば現時点で復活の方法は無い」
「ちっ、相変わらずだな。このクソゲーは」
「っ……そ……そんなっ……」
悪態を吐くキースと悲嘆に暮れるシリカ。一年間《レベリング》をしてこの強さまで辿り着いた。三日という短すぎる期間では何もできない。
「ピナ……ごめんね……！」
ここまでやって来れたのはピナという相棒がいたお陰だった。そして今生きていられるのも。
でも、会うことが出来ない。その事実が涙を流させてしまった。
「キリト」
「あぁ、分かってるさ。俺もそのつもりだ」
二人の間で意味深なやり取りが行われアイテムストレージから何かを見せてきた。
「安心しな。お嬢ちゃん。三日もある。ここあるのを使えばレベル差は何とか埋まるし俺たちも付いていくから大丈夫さ」
そこに載っていたのはシリカが見た事もないレアアイテムばかりだった。
キリトは武器と防具を、キースはステータスをかなりアップさせる指輪やネックレスといったアクセサリーだ。
「え、こんなに……どうしてここまでしてくれるんですか？」
警戒したように尋ねるシリカ。この世界で完全な善意の行動といったものは少ない。常に何らかの打算が働くからだ。見ず知らずの自分にこうまでしてくれたのは何らかの裏があるという事だ。彼女の質問は当然と言っていい。
「キリトが言うなら俺は言うぜ」
「何だよ、それ。笑わないって約束してくれるなら言う」
「笑いません！」
真面目にはっきりと答えるシリカを信頼したのか躊躇いながらも

答えた。
「その……君が妹に似てるからかな」
「は？」
　予想外の答えに呆然とするキースに目元の涙を拭って笑うシリカ。やがて彼女に釣られてキースもケラケラ笑い始めた。
　それを見てキリトは言った事を後悔したのか右手で顔を覆っていた。
「ごめんなさい。何だか可笑しくて……」
「はぁ、キースはどうなんだよ。俺にだけ言わせる気じゃないだろうな？」
「約束したからな。言ってやるよ。俺はまぁ、なんだ。一種の自己満足だ。カッコつけたいんだよ。人助けをして自分を慰めてるだけだ」
　それを聞いてまたシリカはクスクス笑っていた。
「笑うところか、これ？」
「まさかそこまで直球に言われるとは思わなくて……」
「確かになぁ。俺も唖然としたよ」
「事実だからな！」
　二人のやり取りを見てシリカは落ち込んでいた気分が薄れているのを感じていた。少し変わってるけど悪い人達じゃない。彼らの善意は本物なのだ。
「こんなんじゃ全然足りないと思うんですけど」
　貰ったアイテムのコルと自分の稼ぎでは全く釣り合いが取れないがないよりはましだろう。二人に渡すコルを決めようとするがキースがそれを止めた。
「別にコルはいらねぇよ、お嬢ちゃん。俺達のやらなきゃいけない野暮用とも被るしな」
「まぁな。コルは別にいいさ」
「え、あ、本当に何から何までありがとうございます！　私、シリカって言います！」
　そうして出された握手は女の子らしい細く小さな手だった。
「おう。よろしく。俺はキースだ」

「俺はキリトだ。しばらくの間よろしくな」
こうしてピナを蘇生する為に冒険に行くパーティが生まれたのだった。

悪鬼蝟集Ⅱ

《迷いの森》にて暫定的に組まれたシリカ達三人組のパーティは無事、森を抜けて第三十五層の主街区《ミーシェ》へと辿り着いた。
シリカを含む中層プレイヤーが多く拠点としているこの街には人通りも多い。そんな中を三人は色々あった今日の疲れを休もうと宿屋へ向かっていた。
「お、シリカちゃん発見！」
どこからシリカの姿を目にした二人組の男が近付いてきた。どうやらシリカのファンらしい。
「随分遅かったね？　心配したんだよ！」
「今度、パーティ組もうよ。好きなところ連れてってあげるからさぁ」
男達の勝手な言い分に不愉快と言わんばかりにキースの眼が細くなる。そんな豹変した様子にシリカが慌ててキースとキリトの腕を取った。
「ごめんなさい。誘いはありがたいんですけど……　しばらくこの人達とパーティを組む事にしたので……」
嫉妬混じりの視線を受けてキリトがおいおいと声を漏らすが、キースの有無を言わせない鋭い視線で黙らせてしまった。
「あー、何というか君のファンか？　人気者なんだな」
微妙になってしまった空気を払おうと人見知りのキリトが懸命に努力するが今のシリカにそれは生憎、逆効果にしかならない。
「いえ、マスコット代わりに誘われているだけですよ。それなのに《竜使いシリカ》なんて呼ばれて、良い気になって」
暗い顔で泣きそうになるシリカの脳裏には自分を庇ってくれた最愛の友人の死に際が映っていた。
キースはキリトに余計な事言いやがってと言わんばかりに睨みつけたが、キリトはそれを無視して右手をシリカの頭の上に置いていた。
「心配ないよ。必ず間に合うから」
「キリトの言う通りだ。ピナは必ず生き返らえらせてみせる」

二人の少年の自信溢れるその言葉にシリカは涙を拭いながら「はい」と、とびきりの笑顔で頷いた。

「キリト、今日は俺達もここで泊まろうぜ」

「それもそうだな」

「お二人のホームはどこにあるんですか？」

二人はルームメイトではないにしろパーティを組んで戦う事はかなり多いので同じ拠点にホームを構えている。

「第五十層だよ。今夜はもう遅いしここに泊まるけどね」

その時だった。前方から探索から帰ってきたらしい数人のパーティが三人の方へ近づいて来たのだ。彼らを見てシリカの表情が強張る。

「あっれぇ？　そこにいるのはシリカじゃない？　何とか森から出れたんだぁ。良かったじゃない」

そのパーティはシリカが森で喧嘩別れをしてしまったロザリオ達だったのだ。嫌な予感がしたキースは彼女を自分の後ろへ手を引いた。

「あら？　あのトカゲどうしちゃったの？　もしかして……」

《竜使いシリカ》の象徴とも言うべきピナがいない。その事実を、ロザリオは見る人を不快にさせるニヤニヤとした嫌らしい笑みを浮かべながら指摘した。その様子は獲物を見つけた蛇に似ていた。

「ピナは死にました……　でも！」

シリカはそこでロザリオの挑発にも堪えずそれまでの悲しげな表情から一転し強気な表情をして睨み付けた。

「ピナは絶対に生き返らせて見せます！」

キースの前に立ちそう宣言したのだ。

「へぇ……　って事は《思い出の丘》に行くつもりなんだぁ。でもあんたのレベルで攻略できるの？」

半ば挑発が入ったその発言はシリカの心にまた影を落とすには十分だった。だが今は一人ではない。キリトが安心させるように肩を叩き着ている黒尽くめのコートの陰に隠した。一方、キースは堂々と

ロザリオの前に立ちまっすぐ見据えた。
「出来るさ。そんなに難易度の高いダンジョンじゃない」
「あんたもその子の誑し込まれた口？　見たとこそんなに強そうじゃないけど？」
　しかしそれを聞いたキースはハッと鼻で笑ったのだ。ロザリオは優男にしか見えないキースからそんな挑発が返ってくるとは思わず初めて顔を顰めた。
　一発触発の空気が漂う中、見かねたキリトの「そろそろ行こう」という声で三人はその場を後にした。残ったのは獲物を見繕った蛇だった。

《ミーシェ》にあるＮＰＣが経営する《風見鶏亭》という宿屋に入った。ここは一階がレストラン、二階がプレイヤーが宿となっている。ＳＡＯではよく見られる形態だ。チェックインをしてから三人とも夕食を取るため席に着いた。
　しかしシリカは食事を終えてもまだ先ほどのやり取りを気にしているのか申し訳なさそうな顔をしている。
　それを見たキースは大丈夫だと言わんばかりに、ニィと笑みを作りその小さな頭を撫で回した。その笑みは不思議と見ている方も笑いたくなるものだった。
「シリカが気にすることじゃない。ああいった連中はどこにでもいるもんさ」
「そうだな。特にこの世界じゃ、な」
「え……　それってどういう事ですか？」
　ＭＭＯ経験のあるキースはその言葉になるほどと理解したようだったがシリカは今一つピンとこなかったらしい。その反応を見てからキリトは語りだした。
「君はＭＭＯはＳＡＯが初めてか？」
「はい」
「どんなオンラインゲームでも人格が変わるプレイヤーは多い。中には進んで悪人を演じる奴もいる」

ＭＭＯは現実の自分と切り離せて文字通りロールプレイが出来る。嫌な現実を忘れて全く違う自分を演じるのだ。それも自分が積み重ねてきた努力というべき力を使ってだ。キリト、そしてキースにもそれは痛い程わかる。
「シリカやキリトのカーソルは緑だろ？　でも犯罪行為をするとカーソルはオレンジに変わる」
　それを聞いて二人のカーソルを確認するシリカ。しかしその言葉には何か違和感があった。
「その中にはＰＫ，俗にいうプレイヤーキラーをした連中はレッドと呼ばれているよ。しかも質が悪い事にその事を奴らは喜んでんのさ。他のゲームならまだしも生死が懸かってるこのゲームで……　ＳＡＯで、だ。クソッタレが……　俺だって……」
　キースは水の入ったコップを割れそうなくらい強く握り悪態を吐いて俯いた。先ほど会ったばかりのシリカにその心情は汲み取れない。しかしその口調はまるで自嘲するようであった。キリトが首を横に振りして「キース……　もういい」と手でキースの言葉を制した。
「あ、ああ悪い。少し怖がらせてしまったな」
　気まずい沈黙が流れる。シリカはキースの人となりを詳しく知らない。オレンジに何か恨みでもあるのか。そんな彼女だったが一つだけ分かっている事もある。
「お、お二人はいい人です！　私を助けてくれたもん！」
　シリカは身を乗り出しキースの手を握った。なんでこんな事をしたのか自分でも分からない。そうする事が一番だと思ったからだ。二人の暗い顔なんて見たくない。そう思った。
「お、おう。なんか俺の方が慰められたな。ありがとな、シリカ」
　シリカの突飛な行動に唖然としていたがクスッと笑った。今にして思えばそれが彼女の見せるキースの初めての笑顔だったのだ。
　中性的ながら整っているキースのそんな顔を見せられ自分の顔が熱くなっているのがわかる。手で扇ぎたくなるくらいには。
「あっれぇ？　チーズケーキ遅いなぁ。すいませぇん。デザートまだ

なんですけど！」
　そんなシリカの慌てた様子に首をかしげるキースと肩をすくめて苦笑するキリトなのだった。

　食事を終え自分の部家に向かったシリカは軽く鍛錬をしてからすぐベッドに入った。明日の攻略の事もあって無理をするよりは休んだ方が良いという判断だ。ゴロゴロしながら考えているのは二人の事だ。まだ出会ったばかりの二人組の少年。なぜか無性に気になった。男性プレイヤーのファンは大勢いたがこんな事を考えるなんて初めての経験だ。なぜこんなにあの二人の事が気になるのか。
　シリカが一人悶々としているとノックが掛かった。
「シリカ、まだ起きてるか？　明日の第４７層の説明をまだしてないなと思ってさ。無理そうなら明日でもこっちは構わないぞ」
　キースの声だ。確かにまだその説明はされていなかった。シリカが勝手に一人混乱してそのまま解散したからだ。
「いいですよ！　ちょうど私も聞きたいと思ってたところで……」
　ベッドから跳ね起きて開けようとドアノブに手を伸ばすとそこで気づく。自分があられもない姿になっている事を思い出した。
「ちょ、ちょっと待ってください！」
　すぐにメニュー画面から服を取り出した。
　キースがテーブルを用意するとキリトがその上に何かのアイテムを置いた。
「それは何ですか？」
「《ミラージュスフィア》っていうアイテムなんだけど」
　するとそこから立体映像が写し出された。それはまさしく第４７層の詳細な地図にほかならない。シリカはわぁとその幻想的で綺麗な映像に魅せられていた。しかしその向かい側にいるキースの意識は映像ではなく部屋のドアへ向けられていた。キリトと説明しながら視線で会話をする。獲物が釣れたといったところだ。
「ここが第４７層の《主街区》で《思い出の丘》に行くにはこの道を通るんだけど――」

キリトはそこで説明を止めてシッと静かにさせるジェスチャーをした。そして椅子から部屋の入口へ目まぐるしい勢いで飛び出していった。
「誰だっ！」
廊下には誰もおらず階段をバタバタと駆け下りる音だけが響いた。
「な、何ですか？」
「聞かれていたんだよ。《聞き耳》スキルだな。それもかなり上げてる。連中がしそうな手だ」
「連中？」
「いや、なんでもない。今日はもう遅いな。続きは明日にしようぜ」
その一言でこの場は解散となった。

悪鬼蝟集Ⅲ

シリカ達三人組は翌日、第４７層主街区《フローリア》へ来ていた。通称《フラワーガーデン》とも呼ばれている。その由来は層全体が彩色豊かな花々に覆われている事からきている。
。
「綺麗……　夢の国みたい……」
中層プレイヤーであるシリカはここまで上の層に来た事なかった為、初めて見る辺り一面の花景色に目を輝かせていた。近くに咲いている花を間近で見ると、鼻一杯に良い香りが広がった。花の蜜を吸っていた虫が翅を広げ空中へ飛んでいく。それを視線で追いかけると周りのプレイヤー達が楽しそうに歩いている。それも男女二組のペアがほとんどだ。
そう、ここはデートスポットとしても有名でその事を意識すると顔が熱くなり、異性に耐性のないシリカは後ろにいた二人の事を見れなくなってしまった。
「シリカ？」
「あ、はい。すいません！　おまたせしました！」
「よし、なら行こうぜ。なるべく早い方が良いだろうしな」
キースの呼ぶ声に慌てて立ち上がり膝を払った。
そんなシリカを不思議に思いながらも一行は《思い出の丘》に向かうのであった。
広場を出てもそこは花一面に覆われている。《フラワーガーデン》の名は伊達ではない。シリカは目の前を歩く二人の男性プレイヤーの事を考えていた。
今思うと二人の事を何も知らないのだ。現実の事を訊くのはマナー違反だと分かっているが躊躇いながらも口を開いた。
《迷いの森》で組んでいたパーティと揉めて単独離脱したりと彼女は思い切りの良い性格をしているらしい。
「あの……　キリトさん」
昨夜にぼそりと漏らした自分に似ているというキリトの妹。シリ

カはそれが気になっていたのだ。
「妹さんの事聞いていいですか？　マナー違反なんで無理に言わなくても良いですけど……」
キリトは意外そうな顔をしてから溜息を吐いて他の二人を見てから語った。
曰く、自分は妹と実の兄妹ではなく従兄である事。その事を知って自分から離れていった事。祖父から教わった剣道が合わず他にしたい事があったかもしれないのに妹に押し付けて辞めてしまった事。
「そのまま妹を避け続けて逃げるようにＳＡＯに来てしまってさ……　だから君を助けたのは妹を君に重ねて、罪滅ぼしをしているつもりなのかもしれない。ごめんな……」
キリトの悲しそうで今にもシリカは何となくその剣道をし続けている妹の気持ちが分かったような気がした。自分を見下ろすこの少年と彼の妹はたまたまずれ違っていただけだ。そう思った。
「妹さんはキリトさんを恨んでいなかったと思いますよ。だって剣道でそこまで活躍出来るなんて相当好きじゃないとやってられませんよ、きっと！」
シリカは素直に思った事をそのまま口に出していた。何のひねりもないが、だからこそ嘘偽りのない本心から生まれた言葉に曇っていたキリトの顔が少しだけ笑っていた。
「そうだな。剣道の事はよく分からないけど、妹さん全国に行く程うまいんならそれだけ好きだったんだろうぜ。剣道だけじゃない。どんな分野だってやっぱり好きじゃないとやってられない部分ってあるしな」
「……そうかな。そうだと良いけどな。……何だか俺が慰められてばかりだな」
「だって俺の方が年上だしな。これぐらい別に良いだろう？　現実に帰ったら妹さんとちゃんと話しとけよ。家族なんだからさ」
普段は自分の事でも適当な部分があるというのに、妙に面倒見が良いキースのアドバイスにキリトはしっかりと頷いた。それは形だけではなく現実世界で待ってくれている家族の元へ帰ると心でも再度

誓っていた。

「《思い出の丘》に行く前にこれを渡しておく」
「え、これって……」
道中、キースが取り出したのは結晶アイテムである。中層プレイヤーのシリカでは値段が馬鹿にならず滅多にお目にかからない代物だ。そんな高価なアイテムを易々と渡せるのは最前線で活動している二人ならではだろう。
「もし予想外の事態が起きて俺達が『離脱しろ』って言ったら俺達に構わず、これでどこかの層の街に飛んでくれ」
「でも……」
「頼む。キリトの言う通りにしてくれ。万が一何かあってからでは遅いんだ」
「わかりました」
躊躇いながらも二人の必死な視線を受けて結晶を受け取るシリカ。キリトの方は特にその視線が厳しかった。
「大丈夫だ。何があっても俺達がいる。守ってやる」
「そうだな。滅多な事がない限りは使う事なんてないさ。このままこの道をまっすぐ行けば《思い出の丘》だ」
二人の力強い言葉でシリカは「はい！」と大きく元気いっぱいに返した。不安は取り除かれて、そのまま二人の後を追いかけていった。
そうして歩き出して数分、一行はいよいよ初めてのモンスターに遭遇するのだが……
「いやー、何これー！　助けてー！　キースさん、キリトさん！　見ないで助けて！」
綺麗な花が咲きほこるフィールドから巨大な花の形をした植物型の《ｍｏｂ》がシリカに飛び掛かってきたのだ。いきなりの不意打ちに為す術もなく、シリカは両脚を蔓で掴まれて吊るされている。レベルと装備を考えれば大した事のない敵だが、花の真ん中から唾液を垂らし長い舌が伸びる巨大な口に生理的な恐怖を感じてしまったらし

い。パニックで《短剣》を型もなくやたらめったら振り回しているだけなのだから。
「流石にそれは無理……」
「そりゃぁ無理な相談だぜ、シリカ」
落ち着けばシリカでも十分に倒せるのでキースとキリトは手を出していない。いくらミニスカートが捲りあがって下着が見えそうとはいえ、目を瞑って助ける事はいくら二人が強くても不可能だ。キリトは片手で目を隠しているが指の間から覗き込んでいる。キースは元より隠そうという気がなかった。
「そいつはめちゃくちゃ弱いからな！　花の真ん中の赤い部分を叩けばすぐ倒せるぞ！」
キースのアドバイスを聞いて脚を掴む蔓を斬り空中の投げ出されるとすぐに《剣技》の構えを取った。弱点の部分をそのまま一突き入れると、一瞬で巨大花は青いポリゴン片へと変わり消え去った。
そのまま着地したシリカは頬を赤く染めながら二人の方へ振り返った。
「見ました？」
「見てない……」
「白だったな」
「キースさんの馬鹿！」
キースの堂々とした物言いは余計にシリカを怒らせて、キリトもとばっちりを受けて脚を蹴られた。

その後の戦闘も二人にレクチャーを受けながら危なげなく進んでいった。最前線で戦っている二人はサポートに徹しなるべくシリカの《レベリング》や技術向上、戦闘経験を優先させたのだ。もっともダメージを与えたシリカに優先的に経験値が溜まりレベルも一上がっていた。
一度だけピンクのイソギンチャクのような触手を持つモンスターに出会った時だけ助太刀に入ったが、その時のシリカは本当に泣きかけていたが。

そのまま街道に沿って歩いていると周囲より高い丘が見えてきた。
「お、そろそろ見えてきたな。あれが《思い出の丘》だ」
「周囲はモンスターのエンカウント率が高いらしいからな油断せずに気を付けて行こう」
目的の場所が見えて一瞬、緩みかけていたシリカがその言葉に、再度気を引き締めなおした。いつもはシリカが前に出ていたが、警戒の為にキースが前に立っていた。
丘を登ると街道を木立が囲んでおり、情報通り一気に《ｍｏｂ》のエンカウントの率が高まったが、二人のお陰で特に致命的な事態にはならずに丘の頂上へ辿り着いた。
頂上には石で出来た台座があり、それを見つけたシリカはすぐに走り寄っていた。すると途中で何かに気が付いたのか泣きそうな顔で二人の方へ振り返った。
「花がないです！　キースさん、キリトさん！」
「んな馬鹿な！　ってあれだ。もっとよく見ろ！」
焦る気持ちは分からないでもないが、流石に余裕がなさすぎた。怒鳴るキースに慌ててシリカは台座へ視線を戻した。すると台座が輝き、そこから一本の草が芽となって生え始めたのだ。そのまますさまじい速度で葉をつけて、茎がまっすぐ伸びてやがて蕾が出来て白い花が咲いた。
シリカがその花の茎を折って手に取り、指先でタップするとウィンドウに《プネウマの花》と表示されていた。
「これでピナが生き返るんですね……」
「あぁ、その花の蜜を《心アイテム》に振りかければいけるって話だ」
「良かった……」
「でもこの辺はモンスターが多いから街へ戻って安全な場所で生き返らせよう」
今にも小躍りしそうなぐらい歓喜しているシリカを見て、二人は自分達のしている所業に良心がチクリと痛む。が、依頼は依頼と割り切りこの少女を何が何でも守り切ろうと、気づかれないようにお互いに目配せした。

帰り道は行きしなが嘘にように《ｍｏｂ》と出くわさず急いで駆け足気味に歩いていた一行だが、それが返って嵐の前の静けさのようだった。
もう一度ピナに会える喜びで、鼻歌を刻みながら歩くシリカの肩をキリトが掴んで引き留めた。
「そこに待ち伏せている奴出て来いよ」
「バレバレなんだよ。さっさと出て来い」
二人の指摘にシリカは慌てて二人の視線の方向を見るが誰もいない。すると木陰から人影が出てきたのだ。その顔はシリカにもなじみ深い顔であった。
「ロ、ロザリアさん？」
そこにいたのは派手な赤髪に光沢のある革製の黒い軽装の鎧を装備した槍使いの女性がいた。しかしその表情はシリカと組んでいた時のような生易しいものではなく、獲物を見つけた蛇のような笑みだった。
「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね、お二人さん」
「……はん。そんな低いレベルで何抜かしてやがる」
いらついたようなキースの呟きに、ロザリアは眉を顰めるも今回の獲物であるシリカへと視線を移した。
「その様子だと首尾よく《プネウマの花》をゲットできたみたいね。おめでとう……じゃ、さっそくだけど、その花を渡してちょうだい」

「な、何を言ってるんですか！」
　苦労して手に入れたせっかくのアイテムを、喧嘩別れしたとはいえ知人にいきなり寄越せと言われて、シリカは意味が分からず叫んだ。するとキリトとキースが護る様に前に出て来たのだ。キリトは挑発するかのような不敵な笑みをしているが、キースは全くの無表情だ。ただその眼が爛々としており、彼の今の心境を表していた。
「そうはいかないな、ロザリアさん。《オレンジギルド》《タイタンズハンド》のリーダーといった方が良いか？」

　へぇと呟くロザリアだが、そこで初めて顔から余裕のある笑みが消え、代わりに目の前の二人に対する警戒が出ていた。
　そしてその告げられた事実にシリカが動揺した。《オレンジギルド》。その事を先日に二人から散々聞かされていたシリカはロザリアのその緑色のカーソルが犯罪者の証であるオレンジ色ではない事を知っている。
「え、でもロザリアさんは……」
「……オレンジ＝犯罪者という理屈は成り立たないぞ。グリーンのプレイヤーが獲物を見繕ってパーティに入って、他の仲間のオレンジに《圏外》で襲わせる、なんて手段もある。昨日の盗み聞きしてた奴も仲間だろうな」
　淡々と無機質に告げるキースのその態度は今までの気さくで明るいのものとは全く違っていた。シリカは告げられた内容より動揺していたが、ある事に気づいた。
「じゃ、じゃあこの二週間、私と同じパーティにいたのは……」
「そうよ。あんたがいたパーティは私の獲物だったの。戦力を確認して冒険でお金が溜まるを待ってたの」
　一層凶悪な笑みを浮かべ、舌なめずりをするその姿にシリカは自分があのままパーティに止まり続けていた時にの想像をしてしまい本能的に恐怖を感じキースの腕に縋り付いていた。

そしてロザリアはさらに、シリカが抜けた事で獲物を変えるか迷っていたところ、シリカがレアアイテムの《プネウマの花》を手に入れようとしている事を知り奪おうとした事を得意げに語った。
「ふん。オレンジの癖にこの女はそれすらも満足に出来ていないがな」
「はあ？　何言ってんのよ？　私が失敗なんてする訳ないじゃない」
ロザリアの方へ視線も動かさずに、キースはただ呟くだけった。
「オレンジの囚役は獲物に警戒心を与えてはならない。オレンジの間じゃ常識だぜ。その見た目だけならある程度なら釣れるだろうがよ。シリカを怒らせてるようじゃどうせこの先捕まってるだろうさ」
キースのまるで経験談のような話にシリカはさらに混乱した視線を向けたが、生憎気づいていなかった。ロザリアはその挑発じみた説明にちっと舌打ちを鳴らしたがすぐに表情を戻した。
「ふぅん。でもそこまで気がついててノコノコその子に付き合うなんて……馬鹿？　それとも本当にその身体でたらしこまれちゃったの？」
シリカの顔がロザリオの侮辱に羞恥と怒りで真っ赤に染まり、思わず《短剣》を抜きかけるがキースが手で制した。
「いいや、どっちでもないね。俺達もあんたを探してたのさ、ロザリアさん」
「どういう事？」
「あんた、１０日程前に《シルバーフラグス》っていうギルドを襲ったな？　リーダー以外の４人が殺された」
「あぁ、あの貧乏な連中ね」
「リーダーだった男はな？　朝から晩まで最前線の《転移門》広場で泣きながら仇討ちをしてくれる奴を探していた。彼はあんたらを殺すんじゃなく《牢獄》に入れてくれと言ったんだ。あんたに奴の気持ちが分かるか？」
キリトの優男な顔が段々と険しいものとなっていた。しかし当のロザリアは気にした様子もなく自分の赤髪を弄っている。
「わかんないわよ。何よ、馬鹿みたいね正義派ぶって。ここで人を殺

したってほんとにその人が死ぬ根拠無いし。そんなんで現実に戻った時罪になるわけないわよ。だいたい戻れるかどうかも解んないのにさ、正義とか法律とか、笑っちゃうわよね。あたしそういう奴が一番嫌い。この世界に妙な理屈持ち込む連中がね」
　自分が犯した凶行に対して全く後悔のないその態度は聞いていた二人を本気にさせるのは十分だった。
「キリト、こいつら社会のクズ共に説教したって無駄だ。どうせあっちの世界じゃ人殺し扱いで刑務所行きだ。そんな事もわからねぇで人を殺してるとは俺の方が笑ってしまうよ」
　そうは言いながら全く表情を変えないキースに流石のロザリオも我慢ならなかったらしい。指を鳴らして近くで隠れていた仲間を呼び出したのだ。
「あっそ……で？　その死に損ないの言う事真に受けて、あたしらを探してたわけだ。ヒマな人だね。あんた達のまいた餌にまんまと釣られちゃったのは認めるけど……でもさぁ、たった二人でどうにかなるとでも思ってんの？」
　その数は十人。その誰もが下卑た笑みを浮かべており、中にはシリカに対して邪な目線を向ける男もいた。そしてそのほとんどが犯罪を犯した証である《オレンジ》のカーソルが表示されていた。
「キースさん！　数が多すぎます！　脱出しないと！」
　シリカは必死で撤退するよう呼びかけるが、キースが安心させるかのようにフッと笑みを浮かべて、
「大丈夫だ。逃げろって言うまで《結晶》持ってそこで見てな」
「キリトさんも！」
　キリトもシリカの叫びの対して優しく頭を撫でるだけだ。それで少し落ち着きを取り戻すがそれでも見ていて気が気でない。
　そしてそのキリトという人名の聞き覚えがあったのか《オレンジ》の男が騒めき始めた。
「ロザリアさん、こいつ攻略組っすよ！　《黒の剣士》だ……！」
「な、なんで前線にいるはずの攻略組がいんだ!?」
「馬鹿言ってんじゃないよ！　《攻略組》がこんなところにいるわけな

いじゃないか！　どうせ名前を語ってびびらせようってコスプレ野郎に決まってるよ。もう一人は聞いた事のない三下だ。この数で負ける訳ないじゃないか！　」
　ロザリオの一喝に男達はすぐに勢いを取り戻し、逆に《攻略組》の持つ装備やアイテムを奪おうとキリトとキースに襲い掛かった。シリカは思わずこれから起こる惨劇を想像し目を瞑ってしまう。
「キースさん、キリトさん！」
　恐る恐る目を開けると何もしない二人が男達に一切の容赦もなく斬りつけていた。しかし、二人の緑色のＨＰバーが全く減っていない。いや、よく見れば多少の変動はしているのだがすぐに満タンに戻っているのだ。
「
「あんたら！　なにやってんだ！　さっさと殺しな！」
　ロザリアは突っ立っているだけのプレイヤー二人に傷一つ付けられない子分達に向かって感情的に叫ぶが、ただ状況は変わらず男達は意味がない悟ると息を切らしながら攻撃の手を止めた。
「無駄だ。１０秒当たり３００てところか。キリトは俺より軽装だから４００あたりか。レベル差が２０以上も開いてんだ。どの道おめぇら程度の攻撃じゃ《戦闘自動回復》のスキルですぐに回復するんだよ……もう終わりみてぇだしこっちからいかせてもらうぞ」
　その不死身そのものといえる光景に震えながら武器を構える男達だが、次々と悲鳴を上げながら武器を手放し、その手首から《部位欠損》を示す赤いポリゴン片が現れていた。
「手、手が!?」
　絶望的ともいえる《敏捷値》の差で何をされたか全く理解出来ていなかったが。
「ほんとならてめぇらみてぇなクズを生かす必要なんて全くないんだが……依頼は依頼だ、キリト」
「これは俺達の依頼人が全財産を叩いて買った《回廊結晶》だ。《監獄エリア》が出口に設定してある。これで全員牢屋に飛んでもらう！」

今まで感情を出していなかったキースから見る者を殺気が入り混じったその言葉に男達は顔を青ざめさせ素直に応じようとするが、リーダーのロザリアはチッと舌打ちを鳴らしあろう事か《転移結晶》を取り出したのだ。
「たかがてめぇ如きが逃げられると思ったか？」
ロザリアの背後から声がして慌てて振り返ろうとすると、《片手剣》が首から伸びて紙一重で触れていた。
「俺が《オレンジ》になる事なんて今更な話だ。《グリーン》だから許されると思ったかクズ野郎」
そこでついに観念したのか結晶を落として、キリトに指示されて《監獄エリア》に飛んで行った。
それから三人の間で気まずい沈黙が流れて、
「悪い」とキースが頭を下げた。怒涛の展開でまだ混乱気味のシリカは頭が追いついておらずその意味がすぐに理解出来ず何も言えなかった。
「囮の真似をさせちまった。危ない目に合わせちまった」
「それは俺もだよ。この事を言ったら怖がれると思ってしまって、言えなかった」
「い、いえ助けてもらったのはこちらですし……お二人は命の恩人ですから」
「そう言ってもらってありがたい。お詫びと言っては何だが俺の出来る範囲で何かないか？」
「い、いやそんな滅相もない。こちらこそピナを助けていただいたんですから」
「いや遠慮する事ないさ。迷惑掛けたのは俺達なんだから」
キリトにも言われて必死で考え込むシリカ。そして何か思いついたのかキースの顔をじっと見て、
「じゃあ、一つだけキースさんに質問が」
「お、何だ？　何でも聞いていいぞ」
「キースさんの話であった《オレンジ》になるのが今更って……」
しまったという風な顔をするキリトだが当の本人はそこまで思い

詰めてないのかあまり変化はなかった。
「あ、いや無理に教えてもらわなくてもいいですよ！　す、すいません。変な事聞いちゃって！」
「いいのか？」
「あぁ、別に構わんさ。昔の話だしな。それで俺を怖くなっても俺は恨まないさ」
「そ、そういうわけじゃ……」
「いや別に気にして……危ない！　シリカ！」
　その瞬間だった。キースが口を止めたかと思うと、その高い《筋力値》でシリカの小柄な身体を突き飛ばしたのだ。いきなりの事で受け身も取れずそのまま堅い街道にぶつかるが事態はそれどころじゃなかった。キースの背中に投擲用の《暗器》が突き刺さっておりキースのステータスの麻痺を現す表示がされていたのだから。
「ああ、くそう！　外したか！　ま、いっか。1ポイントゲット出来たしな！」
　そしてその突き刺さった方向から耳をつんざく甲高い声が三人の耳に聞こえた。その方向から現れたのは黒いフード付きのポンチョを着た不気味なプレイヤー達だった。
「《笑う棺桶》……」

悪鬼蝟集Ⅴ

《笑う棺桶》。それはＳＡＯに捕らわれている全プレイヤーから畏怖の対象となっているオレンジギルド。先程のタイタンズハンドのような強盗紛いの三下とはその凶悪さは段違いであり、ＰＫつまり殺人が専門のレッドギルドと呼ばれており彼ら自身もそう名乗っている。彼らは冷酷かつ狡猾な殺人手段を次々と考えだしその犠牲者の数は三桁を及んでいる。そしてその忌むべき名は、地に膝をついているキースにとって絶対に忘れられない因縁の相手でもあった。

黒いポンチョを羽織ったプレイヤーが４人。今、キースに向かって麻痺毒が塗ってある《暗器》を投げ、甲高い声で喚いているのは《ジョニー・ブラック》だ。顔を紙袋で覆っている子供が冗談をしているような見た目だがその言動を考えると狂気にしか感じられない。

「裏切者のキースちゃんがこんな中層にいるなんてなぁ。ヘッドも来れば良かったのに！　なぁ、モーナス」

「隣にいるのは、《黒の剣士》か。そこの、小娘も、殺すがな」

小柄な体格に細見の体型。髑髏の形をした仮面で口元以外を多い赤く輝く瞳を持ち、途切れ途切れに話すプレイヤーは《赤眼のザザ》。鋭い突きを生かした《エストック》を主武器としている。《ジョニー・ブラック》とともに《笑う棺桶》の幹部をしている実力者だ。

「……キース殺す……《黒の剣士》も殺す……ヘッドから言われた。それだけ……」

４人の中で圧倒的な体格をしているのが《暴虐のドーガ》。先の軽装な２人は違って、黒く装飾性がない金属鎧を黒ポンチョの下に着ており、自身の身長よりも長い《棍棒》を振り回すパワーファイターだ。その圧倒的な筋力値から繰り出される威力は例え《攻略組》であっても直撃を受ければ一たまりもないだろう。

そしてその３人の背後からキース達を見つめ、ジョニーに話しかけられたのが《笑う棺桶》の副リーダーとされる《モーナスエイド》だ。あまり表に出る事がなくその実力は未知数とされている。個性溢れる見た目をしているこの面々の中で唯一、顔を出している。その裏表

のなさそうな優しい印象を与える柔らかな微笑を浮かべたままのその表情は到底、レッドギルドの副リーダーには、少なくともキリトとシリカには見えなかった。
「うん。そうだね。キース君は一応、僕達の仲間だった訳だしヤルのは最後にしてあげよう。お友達ごっこをしていた《黒の剣士》とそこのお嬢さんが死んでいくさまを特等席で眺める権利を与えてあげるね」
　その穏やかな笑みを崩さないままさらりと悍ましい事を告げるモーナスエイドにキリトとシリカの先程あった印象が逆転する。やはりこの男もレッドだと。その見た目に騙されたプレイヤーが何人も毒牙にかかったのだ。
「じゃあ俺がキースをヤルからさぁ！　ザザとドーガが他の２人な！」
　ジョニーの宣言にキリトはすぐに相棒たる自身の《片手剣》を取り出す。シリカを逃がそうと、様子を見るがその表情は恐怖で青ざめており、足も小鹿のように震えている。すぐに《転移結晶》を使わせようと口を開くが、中断する。まだ1対1ならまだしも麻痺が解けていないキースを守りながらでは結晶を使っている間にシリカが確実に殺されてしまう。
「てめぇら、殺すのは俺だけにしろ！　キリトとシリカには手出すんじゃねぇ！」
　視線だけで人を殺さんばかりにモーナスエイドを睨むキースだが、麻痺状態で何も出来ない有様では《笑う棺桶》の面々は全く意に介さない。
「ふぅん。この状態になったのは君のせいだというのに？」
　悪い事をした子供を諭すようにモーナスエイドは言った。
「僕達から逃げて自分の正体を隠してそこの２人といたんだろ。君は馬鹿じゃない。裏切った自分が僕達に報復されるかもしれない事ぐらい分かってたはずだけどね？」
　その告げられた言葉はキースの胸に深く氷柱のように突き刺さる。自分と一緒にいた２人の友人。さらに今自分を信じて一緒について

きてくれたシリカ。いつも思っていた自分がいれば2人に害が及ぶかもしれない、と。友人2人は俺の過去を話しても一緒にいてくれた。《笑う棺桶》の被害が少ない最前線で戦っていたのはその為である。しかしシリカは違う。素性を隠してオレンジを釣る囮役までさせてしまったのだ。もし、自分がそんな事をレアアイテムを取りに行こうだなんて誘わなければこんな事態に巻き込まれずに済んだだろう。

「こうなったのは君のせいだ、キース。《黒の剣士》が君を守って倒れるのも。そこのお嬢ちゃんが殺されるのも全て君が悪いんだ」

違う。そう言い返したかったがうまく言葉にならない。まるで金属の塊が喉につっかえたように声を出すのが苦しい。外から見れば今にも倒れてしまいそうに見えるぐらいその表情は色を失っている。

「ちょっとー、モーナスー。あんまり虐めちゃ可哀想だぜ」

「今から、全力で走れば、間に合う、かも、しれないぞ。そんな事は、させないが」

ジョニーが片手で《短剣》を弄びながら嘲笑う。ザザやドーガも口には出さないがキースのその姿を見て愉悦をかみ殺しているのだろう。その通りだ。だから、俺を放って逃げろ――そう口に出そうとした時だ。

「違うな。俺はそんな事でキースを変な目で見たりしない。ましてや見捨てるつもりなんてさらさらないね」

「……はぁ、本気かい、君？　《攻略組》ってのは戦闘ばっかで頭の螺子が外れた奴ばっかなのか？」

「あんたらに言われたくないね。一生分かんないだろうさ、特にあんたらみたいなオレンジ連中には、な。キースは、俺をあの時救ってくれた。俺を守ってくれると言ってくれた。なら今度は俺の番だ。俺がキースを守るよ。ここで逃げずに戦う理由なんてそれだけで充分だ」

キリトが言っているあの時、というのは、所属していたギルド《月夜の黒猫団》が壊滅し自暴自棄になっていた時、キースがそれを止めたくれた事だ。あのまま放っておけば間違いなく自分は死んでいた

だろう。キースと出会い初めて自分がしている事の過ちに気づく事が出来た。キースは自分を守ると言った。今度は自分の番だと思ったのだ。
　そのキリトの言葉が表情を見て本気だとモーナスは悟ると、あーあと子供が遊んでいた玩具に飽きたような反応をした。
「お熱い友情だねぇ。そんな仲良しこよしの友情ごっこがしたいんなら一緒に地獄に送ってあげるよ」
「……お前たちにキースに指一本触れさせやしない。もちろんシリカにもな」
「キリトさん……」
　キリトの決意を嘲笑うモーナス。しかしそんな挑発にも乗らず《片手剣》を構えて冷静に戦力を分析する。逃げる気は全くないが、いかんせんこの戦力差は大きい。せめて《攻略組》クラスのプレイヤーがもう1人欲しいところだ。しかしないもの強請りをしても状況は変わらない。
「はぁ、もう御託はいいや。その目障りな虫けらを殺せ」
　それまでの柔らかい笑みから一変し、冷たい人形のような顔をしたモーナスが命令すると3人のレッドプレイヤーが己の武器を構えてキリトに向かってきた。
　キリトの頭にはこれまでの光景の蘇っていた。　キリトの頭にはこれまでの光景の蘇っていた。
「……殺す……《黒の剣士》……！」
「ひゃっはー！　死ねや！」
「死ね、黒の剣士」
　タンクのドーガが前に躍り出る。その巨体に似合わぬ速度で巨大な《棍棒》を振り回すその姿はあまり《圏外》に出ない下層プレイヤーならば《ボスｍｏｂ》と勘違いしてもおかしくはないだろう。軽装で《耐久値》にそこまで経験値を割り振っていないキリトでは直撃すればＨＰを一気に削られるだろう。そのキリトは典型的な《ＳＴＲ―ＡＧＩ特化型》という筋力値と敏捷値が高い。《パリィ》をしてもその高い筋力値と耐久値で力負けをしてしまい、その隙に《剣技》を叩きこ

まれる可能性が高い。そうなれば一環の終わりだ。キリトはその軌道を正確に見切ると後方へ飛ぶ。

もちろん、そんな事は《笑う棺桶》に所属する3人にはお見通しである。もっとも高い敏捷値を誇るジョニーがキリトの右側に《短剣》を、《閃光》の異名を持つ《攻略組》最速のプレイヤーが放つ正確無慈悲な《細剣》の突きに匹敵する鋭い刺突を放つザザが右側に《エストック》を突きだしていた。

キリトはそれを視線だけで確認するとその異常な反応速度で打ち払った。力勝負で負かる判断した2人はその勢いで後退した。しかもジョニーは《投擲用》の《短剣》を投げつけてだ。何とか身体をひねりそれを躱すキリトだが、意識がそれに一瞬持っていかれてわずかに隙が出来る。それを見逃すザザではない。右手で持つ《エストック》がピンク色に輝き始めた。《剣技》の発動予兆のライトエフェクトだ。《剣技》の発動にもすぐに反応するキリトだが《剣技》で受け止める事は不可能だ。その隙にドーガにやられてしまうからだ。

ここでもキリトが持つ常人離れした反応速度が生きた。何とか直撃しない態勢と位置に身体を持っていき直撃を避ける事にしたのだ。しかし、そんな考えを周りの見ているだけのプレイヤー、ましてや《攻略組》でもない中層プレイヤーが理解出来る訳がない。そしてその例に漏れずシリカも、キリトがザザの連続攻撃が直撃したと思ったのだ。

「キリトさん！」

その叫び声が致命的だった。一瞬キリトの意識がその声に持っていかれて極僅かに反応が遅れてしまったのだ。そして、ザザの口元の笑みが浮かんでいた。その隙は直撃を与えるには十分過ぎた。

《エストック》の連続攻撃を食らいそのまま後方へ吹き飛ぶ。キリトのレベルではまだ致命傷なりえず、HPを削れてはいないが問題はそこではない。大技というべきザザの《剣技》を真正面から受けたという事は確実に仰け反ってしまい大きな隙が出来る。その隙はシリカが見ても分かるほどの大きなものだ。そしてそこに付けこむのはザザでない。ましてや《短剣》使いのジョニーでもない。

この3人の中でもっとも容赦のない一撃を与える事が出来るドーガだ。その《棍棒》からライトエフェクトが輝く、それもキリトの頭に向かって。

見ていたモーナスに残虐な笑みが灯る。見ていたシリカはその光景を直視出来ず目を瞑ってしまう。キリトの脳内には、これまでの光景が走馬灯のように蘇っていた。現実世界に残してきた家族、その血縁関係を知り遠ざけていた妹、《ビーター》の悪名を気にせず付き合ってくれたアスナや、エギル、クラインそして自分を救ってくれた2人の少年の顔が次々と浮か彼らに向かって、ただ一言、悪いと呟いた。

「キリトぉぉお！」

キースの叫び声が響いた。その眼には鮮血のようなライトエフェクトが映っていた。

誰もが《黒の剣士》の、キリトの死を確信した。

――誰かがえっ、と呆けたように呟いた。キリトは倒れていなかったのだ。それどころかドーガの攻撃を受けてすらいなかった。

キリトは見た。目の前に立つ巨漢のオレンジプレイヤーが棍棒を振り上げたまま硬直しているのを。そしてその首元に《短剣》が刺さっていたのだ。

「俺の前でそんな無様な死を視せてくれるなよ、オレンジども」

空より透き通った蒼眼の《死神》がそこにはいた。